SHOUBUZAWA-A SITE

菖蒲沢A遺跡

―― 平成7年度県営圃場整備事業堀地区に
伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

1996. 3

茅野市教育委員会

菖蒲沢A遺跡

―― 平成７年度県営圃場整備事業堀地区に
伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

１９９６．３

茅野市教育委員会

序　文

菖蒲沢Ａ遺跡は、この度、県営圃場整備事業堀地区の実施に伴い、記録保存を前提に発掘調査を茅野市教育委員会が行ったものです。

堀地区の圃場整備事業に伴う発掘調査は平成３年度より行われ、数多くの成果がありました。当遺跡の南側に位置しています国指定特別史跡尖石石器時代遺跡や与助尾根南遺跡、また、平成５年度に調査が行われました立石遺跡などの大遺跡があり、これらの遺跡との関連性が注目されます。

今回の調査は、平成６年度に行われました第１次調査に引き続いての調査です。前回の調査では縄文時代前期末、中期初頭、後期前半までの土坑群が発見されました。

また、遺物は早期よりみられ、今回調査した遺構にも前回と同様の早期の土器片が出土しています。遺構は前回の調査では、発見されていなかった縄文時代中期後半の住居址が１軒検出され、その周辺からは多量の土器片の散布が発見されました。

また、この他に平安時代の住居址も１軒検出されました。近年は八ヶ岳西南麓地方でこの時期の住居址が発見されることが多く、今回の調査では、麻皮剝器（あさかわはぎき）といった生業に関わる遺物も検出されました。以上の成果が考古学、地方史研究に十分に活用され、また、今後の埋蔵文化財保護のために役立つことを切望します。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会などの各関係機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力また、発掘調査に関わった多くの皆様のご尽力により、調査を無事終了し、ここに報告書を刊行することができますことに、心から御礼申し上げます。

平成８年３月

茅野市教育委員会
教育長　両角　徹郎

例　　言

1．本書は、長野県諏訪地方事務所長大西一郎と茅野市長原田文也との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した平成８年度県営圃場整備事業堀地区に伴う、長野県茅野市湖東堀菖蒲沢Ａ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、長野県諏訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助並びに県費補助金を得て、茅野市教育委員会が平成７年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第２節４として記載してある。

3．発掘調査は平成７年５月24日から８月３日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は発掘終了後から始め、平成８年３月まで茅野市文化財調査室に於いて行った。

4．本書の執筆は柳川英司が行なった。

5．調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

6．本報告に係わる出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財調査室で収蔵・保管されている。

目　　次

序　　文　　茅野市教育委員会　教育長　両角徹郎

例　　言

目　　次

第Ⅰ章　発掘調査の概要……1

　第１節　発掘調査に至るまでの経過……1

　第２節　調査の方法と経過……1

第Ⅱ章　遺跡の概観……4

　第１節　遺跡の立地と地理的環境……4

　第２節　遺跡の位置……8

第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物……10

　第１節　遺跡の層序……10

　第２節　発掘された遺構……12

　　１．Ａ区の遺構……12

　　２．Ｂ区の遺構……17

　第３節　出土した遺物……27

　　１．縄文時代の遺物……27

　　２．平安時代の遺物……31

第Ⅴ章　結　　語……32

図　　版

抄　　録

第Ⅰ章　発掘調査の概要

第1節　発掘調査に至るまでの経過

平成6年12月　「平成7年度文化財関係補助事業計画書」を提出し、3,350㎡を県営圃場整備事業堀地区に伴い緊急発掘調査を行うことになった。

平成7年2月20日　6教文第7-11-1号「県営圃場整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について（通知）」で長野県教育委員会より通知され、事業費8,800,000円（農政側負担7,744,000円・文化財負担1,056,000円）で発掘調査を行う事になった。

平成7年3月28日　7教文第109-9号「平成7年度県営圃場整備事業堀地区菖蒲沢A遺跡の埋蔵文化財発掘調査の通知（第98条の2第1項）の通知を長野県教育委員会文化課長宛に提出

平成7年5月15日　平成7年5月1日付埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書により長野県地方事務所長と発掘調査業務委託の契約を7,744,000円で締結。

平成7年6月7日　7教文第1号「平成7年度文化財関係国庫事業について（通知）」

平成7年6月16日　7教文第2号「平成7年度文化財補助事業補助金の内示について（通知）」

平成7年6月22日　7教文第20-2号「平成7年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出」

平成7年6月30日　7教文第23-1号「平成7年度文化財保護事業補助金申請書（県費）」提出

平成7年9月27日　7教文第1号「平成7年度文化財関係国庫補助事業の交付決定について（通知）」

平成7年9月27日　7教文第2号「平成7年度文化財保護事業補助金の交付決定について（通知）」

平成7年11月24日　7教文第80-2「平成7年度市内遺跡発掘調査補助金変更承認申請書」提出

第2節　調査の方法と経過

1．調査区の設定

試掘調査によって調査区を設定し、遺構の広がる部分を重機を用いて表土除去を行った。この結果、本調査面積は3,590㎡となった。これは菖蒲沢A遺跡全体の1/3にあたり、平成6年度調査分の1,380㎡と合わせて1/2を発掘したことになる。遺構の立地の状況から、調査区を2ヶ所に分け、北側をA区、南側をB区とした。

グリットについては、調査範囲内に設定し、遺構の記録、遺物の取り上げの基準とした。グリットの基準は、公共座標x＝1690、y＝－24000を基準点とし、この基準点からA・B区とも一辺10mのグリットを設定した。ベンチマークは1043.308mを設定した。

2．発掘調査の経過

平成7年5月24日より遺跡の範囲を確認するための試掘調査と、表土剥ぎを重機により行う。試掘調査を行ったのは、平成5年に行った試掘調査の行われていなかったB区の東側と西側である。この結果、遺跡の東側に平安時代の住居址が1軒検出された。A区は住居址1軒と方形柱穴列1基、集石1基、焼土址2基、土坑が検出されたが、遺物がA区のほぼ全面で検出されたため調査区がかなり西方まで伸びることになった。発掘調査は、土器が多量に散っているA区の遺構確認に時間がかかったが、遺構を検出することはできなか

った。遺構図化の短縮と省力のため８月１日に航空測量を行った。発掘調査が終了したのは８月３日である。

３．調査日誌（抄）

５月24日　Ａ区の表土剥ぎと表面採取を行う。表採はＡ区中央で多く拾うことができる。新たにＡ区西端においても土器片を採取することができた。表土剥ぎはＡ区西端より行い、Ａ区西端で15cmほどの黒耀石製のスクレイパーと縄文中期後半の土器片が出土している。

５月25日　昨日スクレイパーなどが出土した地点の周辺で遺物の散布が見られる。縄文中期後半の土器片の他、平安時代土器片が数点見られた。

５月26日　Ｂ区の表土剥ぎを行う。確認できたのは平安時代の住居址１軒と土坑１基である。

５月30日　Ａ区a・b－４・５グリットで遺構確認を行う。ここは、縄文中期後半と平安の遺物が見られる。これらの遺物は道路敷の下に存在していたと考えられる遺構に伴うものであろう。

６月５日　Ｂ区の東側を土置場にする予定で遺構確認を行ったところ、平安時代の住居址を１軒検出した。尾根のほぼ中央部に位置している。

６月６日　Ｂ区１号住居址の発掘を始める。

６月７日　Ｂ区１号住居址の発掘を行う。焼土址が住居址内東側で検出され、この付近より麻皮剥器が出土している。また、遺構に伴ってはいないが、打製石斧が出土している。

６月８日　Ｂ区１号住居址のベルトのセクションを取り、ベルトを外す。灰釉陶器、土師器、黒色土器の坏、碗、皿、羽釜が確認できる。

６月12日　Ａ区の東側より多くの土器が検出され、その中よりＡ区焼土址１が検出された。Ｂ区１住居址の撮影と遺物の取り上げを行う。

６月20日　Ｂ区１号住居址のかまど内から遺物が多く検出された。竈前部の土坑から大きな軽石が出土している。また、焼土址１より遺物が多く出土している。住居址のほぼ中央に、不整形な土坑らしき遺構があり、この遺構中にピットらしいプランが数基見られる。

６月21日　Ｂ区は東側に土坑が展開している。これらの土坑はプランが明確ではなく、土層はだいたい三角堆土を示す。しかし、壁面は明確でないものが多い。

６月22日　１住付近から直径50cm大の楕円形の土坑が検出されたが、出土遺構がほとんどなく、時期の決定が難しい。

６月26日　ぐずついた天気が続き、１日に何回も作業が中断した。

６月27日　Ｂ区１住の竈の横から土坑が検出され、土坑中より土師器坏が検出された。

６月28日　Ａ区は遺跡の範囲が不明確なため、トレンチを入れたが、ある一定のレベルより下から遺物の検出が見られなくなる。しかし、遺構は確認できていない。縄文中期後半の住居址を１軒検出した。

６月29日　Ｂ区１住のほぼ中央に1.5ｍ程の床下土坑が検出された。この中には４基程ピットが掘り込まれていた。Ａ区は南北方向にトレンチを入れるが、何も検出できていない。

６月30日　Ａ区b・c－14・15グリットは土器が多く検出されるが、遺構は確認できない。

７月11日　Ａ区１号住居址の発掘を始める。住居址内より７×10cm大の黒耀石が出土する。

７月12日　雨のため午前中で作業を中止する。

７月13日　Ａ区１住の発掘を行う。炉の北側より未焼成の粘土を検出した。住居址は南側の道路によって2/3程切られてる。

7月17日　A区b－13から住居址の炉ではないかと考えられる遺構が検出されていたが、集石となった。拳大の礫が楕円形に積み重なり、中には焼石が見られる。また、A区の最東部より黒耀石が多く検出された。

7月18日　A区最東部で土器や黒耀石の散布が見られたが、遺構が確認できず耕作による攪乱を受けていた。

7月24日　写真測量の打ち合わせのため、昭和株式会社の戸崎技師が来跡。A区a・b－4・5グリット付近よりかなりの量の遺物が検出された。

7月26日　A区a・b－4・5から集石らしき遺構が検出された。

7月27日　A区a・b－4・5の道路際より平安時代の土器片が多く検出された。

7月28日　諏訪地方事務所土地改良課主催の建設現場代理人研修会を当遺跡で行う。

8月1日　航空測量を行う。

8月3日　現場の撤収作業を行い、発掘作業を終了する。

4．調査組織

調査主体者　両角昭二（平成7年4月1日～平成7年9月30日）・両角徹郎（平成7年10月1日～）
（教育長）

事　務　局　宮下安雄（教育次長）

文化財調査室　両角英行（室長）　鵜飼幸雄（係長）　守矢昌文　小林深志（尖石考古館学芸員兼務）　大谷勝己　小池岳史　功刀　司　百瀬一郎　小林健治　柳川英司　大月三千代

調査担当者　柳川英司

調査補助員　伊藤千代美　占部美恵　田中慎太郎

発掘調査・整理作業協力者

伊藤京子　占部美恵　太田友子　岡　和宣　金子清春　北原きよゑ　久根種則　小平千恵子　小平長茂　小平ツギ　小平三行　小平義市　清水太助　清水つるゑ　清水豊一　清水みゑ　武居八千代　武田けさ子　立岩貴江子　長田　真　花岡照友　林　靖之　原ちよ子　堀内　潭　柳平年子　吉田淑子

基準点測量：株式会社 嶺水

遺構測量委託：昭和 株式会社

遺物実測委託：株式会社 東京航業研究所

第II章　遺跡の概観

第１節　遺跡の立地と地理的環境

菖蒲沢Ａ遺跡は茅野市豊平4734-2693番地他に位置する。遺跡の南西方向には南大塩地区があり、北西方向には堀地区がある。堀地区はＪＲ中央本線茅野駅から東北東約８㎞に位置している。遺跡の東側には森がせまり、別荘地である三井の森がその森の中にある。さらにその東側は広見地区である。

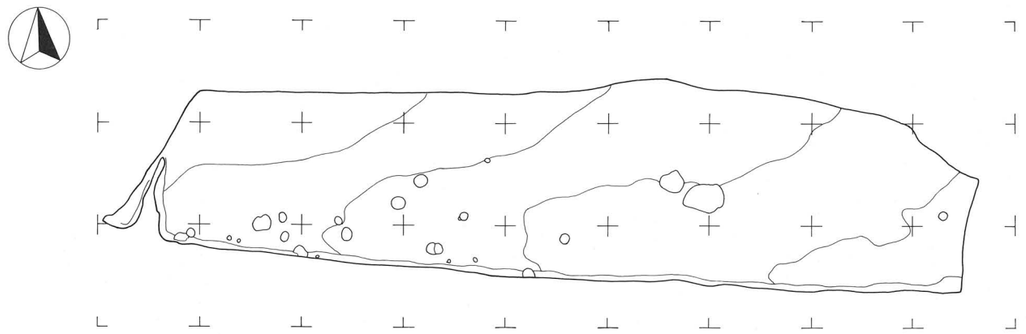
東側の森の中には南大塩地区で祀る「狐之宮」の祠がある。祠自体は平成４年に建立された新しいものであるが、祠の傍らに「狐石」と呼ばれる石があり、これが御神体となっているようである。地元の方の話によると、かつては「山の神」であったようで、享保３年（1733）作成の『旧諏訪藩主手元絵図』では遺跡周辺に山の神が見える。

また、北側には芹ヶ沢地区がある。遺跡の周囲の状況は近年の圃場整備事業により一変し、広大で平坦な田地と畑地が広がっている。圃場整備以前は小規模な田畑が階段状に広がっていた。今回の発掘でＡ区としたところは最近開墾された場所であり、それまでは松林であったという。

本遺跡は八ヶ岳の火山活動によってつくられた山麓斜面が小河川の浸食によって創出された小規模な尾根状台地に立地している。遺跡の周辺にはこのような手状に伸びる小規模な尾根状台地の背中の部分に展開している小規模な集落であることが考えられ、その主な部分は台地のほぼ中央部を中心に広がっていたのではないかと想定される。今回発掘した区域は尾根の頂を東西方向に走る道路敷の南側とその南側の台地であり、菖蒲沢Ａ遺跡全体の約1/3の3,590㎡で、昨年度発掘を行った箇所を含めると4,970㎡となり、遺跡全体の1/2を発掘したことになる。

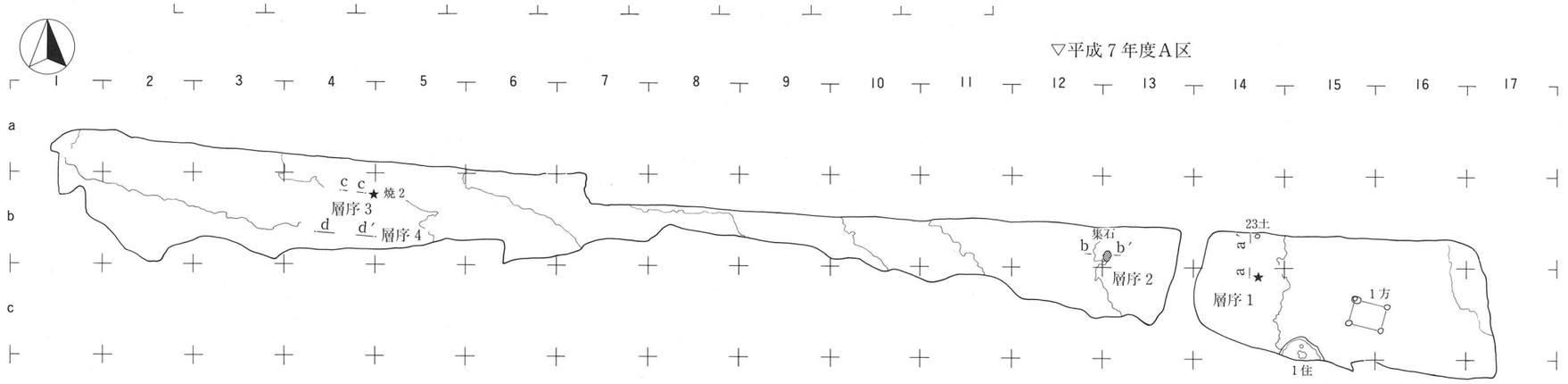
Ａ区の占地する台地の南側の地形はかなりの急斜面であり、途中でくびれて台地は狭くなり、それより東側は台地がやや広くなる。昨年の発掘区は緩やかに北側に傾斜している。Ａ区の北側には現在でも使用している汐が流れている。汐が近い場所は湿気がとても強い。Ａ区の東北側の林の近辺には小規模ながら湿地が広がっている。

Ｂ区はＡ区の南側の尾根状台地に位置している。Ｂ区の尾根はＡ区に較べて広くて平坦であり、特に広くなっている場所の台地の頂部を中心として遺構が展開している。Ａ区とＢ区の間には深い谷があり、小河川が流れている。この谷部も湿地となっている。Ｂ区の南側は平坦で国指定特別史跡尖石石器時代遺跡へと続いていく。遺跡の周辺にある湿地は古くからの水の供給源の一つではなかったかと推察される。

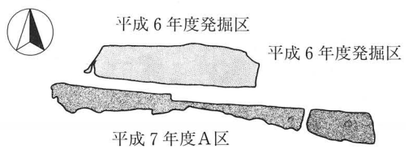


◁平成６年度発掘区

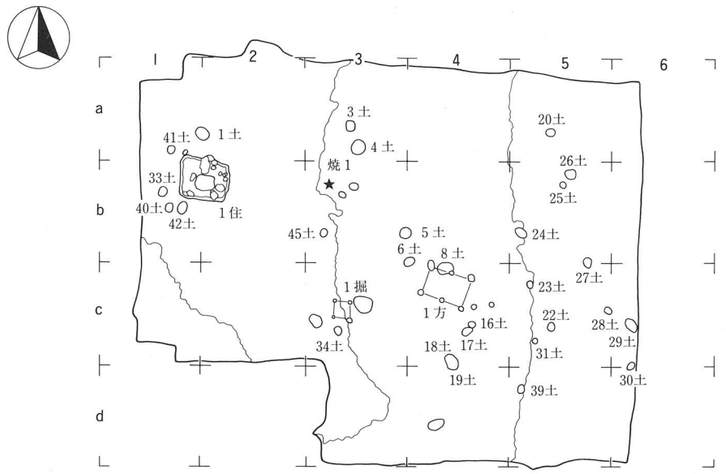
★焼土址



▽平成７年度Ａ区



平成７年度Ｂ区



△平成７年度Ｂ区

第１図　菖蒲沢Ａ遺跡全体図（1/600）

0　20m

第２図　菖蒲沢Ａ遺跡の地形と発掘区（1/3,000）

第２節　遺跡の位置

１．第１次調査の概要

第１次調査で検出された遺構及び遺物は縄文時代と近代である。縄文時代の遺構はすべてが土坑であるが、遺物の出土が少ないため、時期を確定できる土坑は少ない。このうち前期前半の土坑が１基、前期後半の土坑が２基検出され、残りの17基は形態から縄文時代と考えられるものの、時期は不明である。遺物は縄文時代早期の押型文土器と前期前半・前期後半の諸磯Ｃ式期と十三菩提式期の土器、後期前半の堀之内Ｉ式期の土器と、黒耀石片が出土している。このうち諸磯Ｃ式期と十三菩提式期の土器は土坑の中より検出されているが、早期押型文と後期の土器は遺構から検出されていない。

２．周辺の遺跡

堀地区は平成４年度からの圃場整備事業により大変多くの遺跡が発掘された。菖蒲沢Ａ遺跡の500ｍ南には国指定史跡尖石石器時代遺跡があり、西側1.4～2.4kmに立石・城・水尻・中ッ原Ａ・Ｂ・珍部坂Ａ・Ｂがあり、いずれも近年の県営圃場整備事業により発掘されている。また、遺跡の北側には、隣接するかたちで菖蒲沢Ｂ遺跡がある。さらにその北側は1.4kmおいて芹ヶ沢地区に至るが、この間は遺跡の空白地帯となっている。芹ヶ沢地区には広井出遺跡（236）や神ノ木遺跡（53）があり、縄文時代前期前半の住居址が発掘され、縄文時代早期の土器も検出されている。また、この付近には前期前半の神ノ木式土器の標識遺跡である神ノ木遺跡（53）や前期後半の下島式土器の標識遺跡である下島遺跡などがある。神ノ木遺跡では昨本年度の試掘調査により縄文時代前期の大規模な集落址が確認されている。これらの遺跡の概略を以下に述べていきたい。

与助尾根・尖石遺跡（85・87）　国指定特別史跡。明治26年以来調査が行われ、現在まで確認調査が行われている。確認された遺構は平成6年までの調査で縄文中期の住居址が両遺跡併せて98軒と土坑が数多く検出されている。出土遺物は縄文時代中期が中心であるが、早期の土器片や、平安時代の遺物も見られる。

立石遺跡（80）　平成５年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構は縄文時代中期後葉から後期前半までの住居址が35軒・方形柱穴列17基・土坑（報告書では「穴」）が1524基・配石遺構３基、平安時代の住居址１軒などが検出された。出土遺物の中には土偶の出土もみられた。

城 遺 跡（81）　平成３年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構は縄文時代中期前半の藤内Ｉ式期の住居址２軒、中期初頭と前半の土坑27基、平安時代の住居址２軒が検出している。遺物は縄文時代早期末・中期初頭・中期前半の土器及び石器と平安時代の土器片が出土している。

水尻遺跡（82）　平成３年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構は縄文時代中期前半狢沢式期の住居址１軒と中期前半を含むと考えられる土坑７基である。遺物は縄文時代早期末・中期初頭・中期前半が出土している。

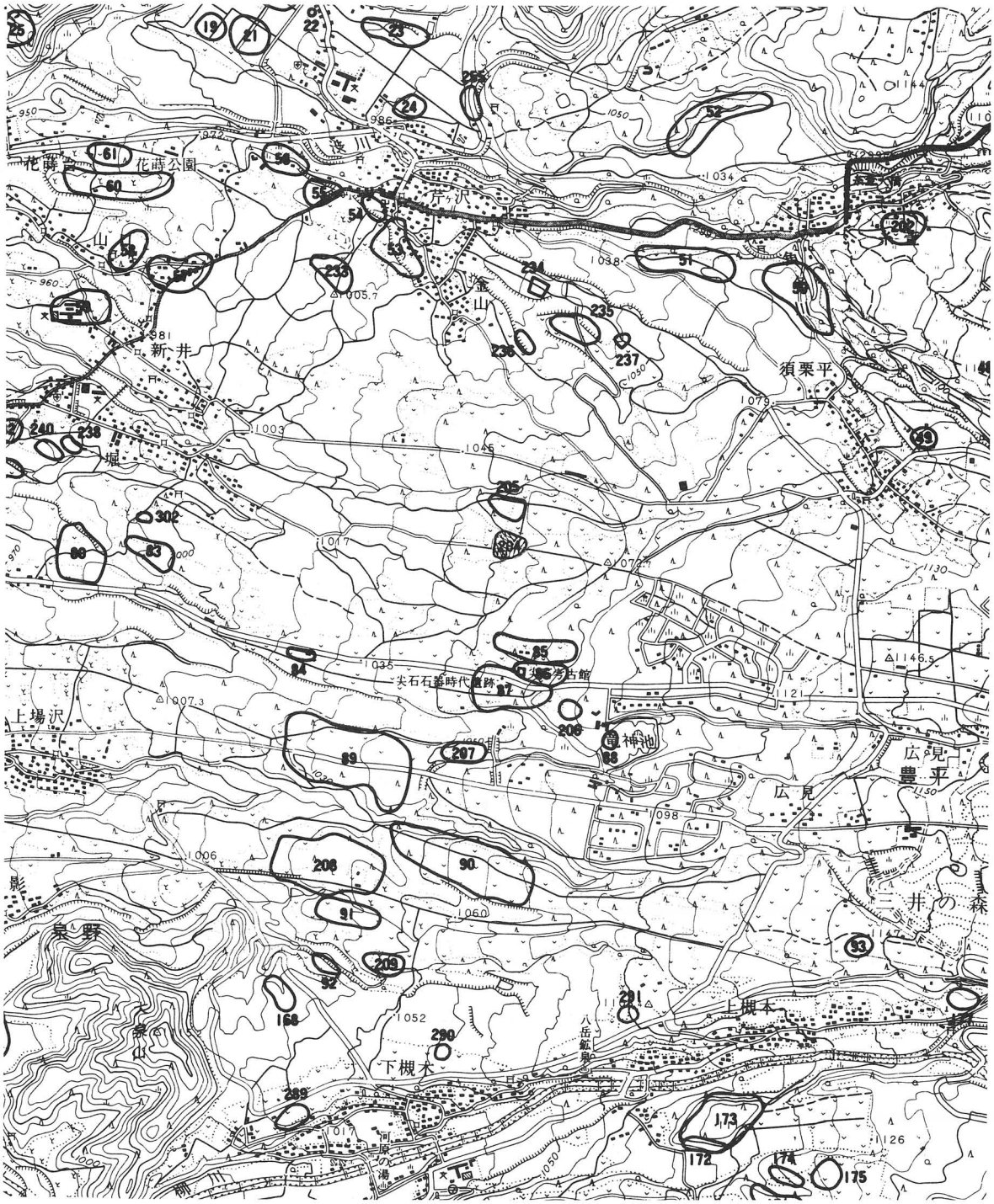
中ッ原Ａ遺跡（83）　平成４年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構は縄文前期初頭の住居址１軒、縄文時代後期前半の住居址が１軒、方形柱穴列３基、平安時代の住居址が１軒、また、時期不明の土坑が数基である。

与助尾根南遺跡（86）　昭和30年と平成５年に尖石考古館建設などにより発掘された。検出された遺構は縄文時代前期の住居址１軒、中期後半の住居址７軒、落し穴３基、土坑１基、特殊遺構、平安時代の住居址１軒が検出された。遺物は縄文時代早期押型文や前期前半、中期後半の土器が出土している。

中ッ原Ｂ遺跡（302）　平成４年度の県営圃場整備事業により発掘された。遺構は発見されなかったが縄文中後期の土器片や石器と中世・近世の陶器片が検出された。

珍部坂Ａ・Ｂ遺跡（238・240）　平成３年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構は縄文時代中期前半藤内Ⅰ式期の住居址１軒と、時期不明の土坑が１基である。遺物は縄文中期前半の藤内Ⅰ式期の土器片と土偶、石器、平安時代の土師器片、中世の内耳土器片が出土している。

菖蒲沢Ｂ遺跡（205）　未発掘の遺跡である。平成３年度作成の『茅野市遺跡台帳』によると、縄文時代中期後半の土器片とあるが実態は不明である。



第３図　菖蒲沢Ａ遺跡位置図（1/25,000）

第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物

第１節　遺跡の層序

Ａ区は道路の南側が急傾斜となっており、Ｂ－13グリットより西側は耕地ではなかったため耕作による撹乱は少ない。b－４・５グリットでは一部抉られているように地山が切れており、この部分に黒色土が堆積していた。掘り下げてみると礫が集中している箇所が検出された(層序４)。また、礫の上面より多くの土器や石器の破片が検出された。礫の周辺の土層には撹乱の痕跡は見られず、礫もまとまりがなく広い範囲で広がっているため、人為的に集められたものではなく、流入したものであることが考えられる。

Ａ区b－14より東側は、畑地であったため耕作による撹乱を受けていた。特に最東部の南側の斜面は撹乱がひどく、遺物の散布は見られたが遺構を確認することはできなかった。層序１の周辺は大量に土器片や黒耀石片が散布しており、これらの遺物はほとんどが、層序１の第２層中より出土しているため、遺物の包含層は第２層であることがいえる。

層序２のあるb・c－12･13付近も、大量の土器片や黒耀石片の散布が見られた。集石の出土している付近は、かつて道路が造られたため、かなりの撹乱を受けていたが、集石の出土している部分は辛うじて撹乱から逃れていた。遺物の包含層及び、集石の包含層は層序３の第１層中であることが考えられる。

Ｂ区は尾根状台地の背中の部分に当たり表土がとても浅く、遺構のすぐ上面まで耕作が及んでいた。

層序１

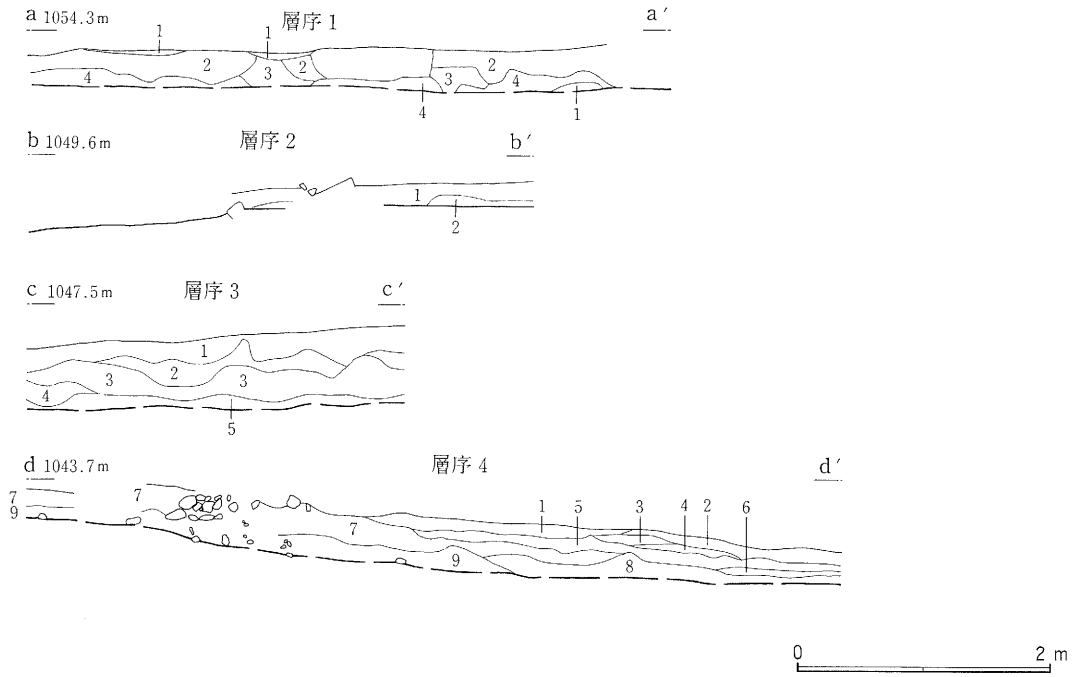
1　黒 色 土　ローム粒子を少量含む。粘性あり、しまりなし。
2　暗褐色土　ローム粒子、5㎜大の炭化物を少量含む。粘性あり、堅緻。
3　暗茶褐色土　ローム粒子、5㎜以下の炭化物を少量含む。粘性、しまりあり。
4　暗茶褐色土　ローム粒子を多く、５㎜以下の炭化物を少量含む。粘性、しまりあり。
5　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。粘性、しまりあり。

層序２

1　黒 色 土　ローム粒子を少量、10㎜大のロームブロックを稀に含む。粘性あり、堅緻。
2　暗黄褐色土　ローム粒子を多く含み、10㎜以下のロームブロックを少量含む。粘性、しまりあり。

層序３

1　表　　土
2　黒 色 土　ローム粒子を少量と30㎜以下のロームブロックを少量含む。粘性、しまりあり。
3　暗褐色土　ローム粒子を多く、30㎜以下のロームブロックを少量含む。下部より白黄色のパミスの出土がみられる。



第 4 図　遺跡の層序（1/60）

層序 4

1　黒 色 土　ローム粒子を少量含み、10㎜大のロームブロックを少量含む。しまり弱く粘性あり。

2　暗褐色土　ローム粒子を 1 より多く含む。粘性あり、しまり弱い。

3　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。しまり弱く粘性あり。

4　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまりはやや堅いが脆く、粘性あり。

5　暗褐色土　やや赤みがかる。ローム粒子を少量含み、5㎜以下のロームブロックを少量含む。しまり弱く、粘性あり。

6　暗褐色土　やや黄色みがかる。ローム粒子を 5 より多く含み、10㎜大のロームブロックを稀に含む。しまり弱く粘性あり。

7　黒 色 土　ローム粒子を少量含み、10㎜以下のロームブロックを多く含み、軽石を少量、拳大の礫を多く含む。しまり堅く、粘性あり。

8　暗褐色土　黄色みがかる。ローム粒子を多く含む。粘性あり、しまり弱い。

9　暗褐色土　黄色みがかる。ローム粒子を多く含み、20㎜以下のロームブロックを多く含む。粘性あり、しまりはとても堅い。

第２節　発掘された遺構

１．Ａ区の遺構

Ａ区は縄文時代の住居址１軒、方形柱穴列１基、集石１基、土坑１基、焼土址１基が検出されている。また、平安時代の遺構も存在し、焼土址が１基検出されている。

１号住居址（第５・６図、図版１－５・６）

全長の約半分を南側の道路によって破壊された住居址である。推定で軸線はＮ－45°－Ｅと考えられる。平面形は北西側の隅がやや角張る点などから考えると隅丸方形を呈するものと考えられる。なお、炉よりの位置から推定するとやや北西－南東方向に長い長方形であることも考えられる。

壁の掘り方は斜面に構築されているために明瞭に検出できなかったが、もっとも深く掘り込まれている北側掘り方から類推すると割合直に近い掘り方を有していたと思われる。周溝は割合掘り方のしっかりしていたものが全周し、北西側で14cm、奥壁に当たる北東側では15cmの深さを測る。周溝の幅は北西側で12cm、北東側では26cmを測り、北東側が幅広いものとなっている。

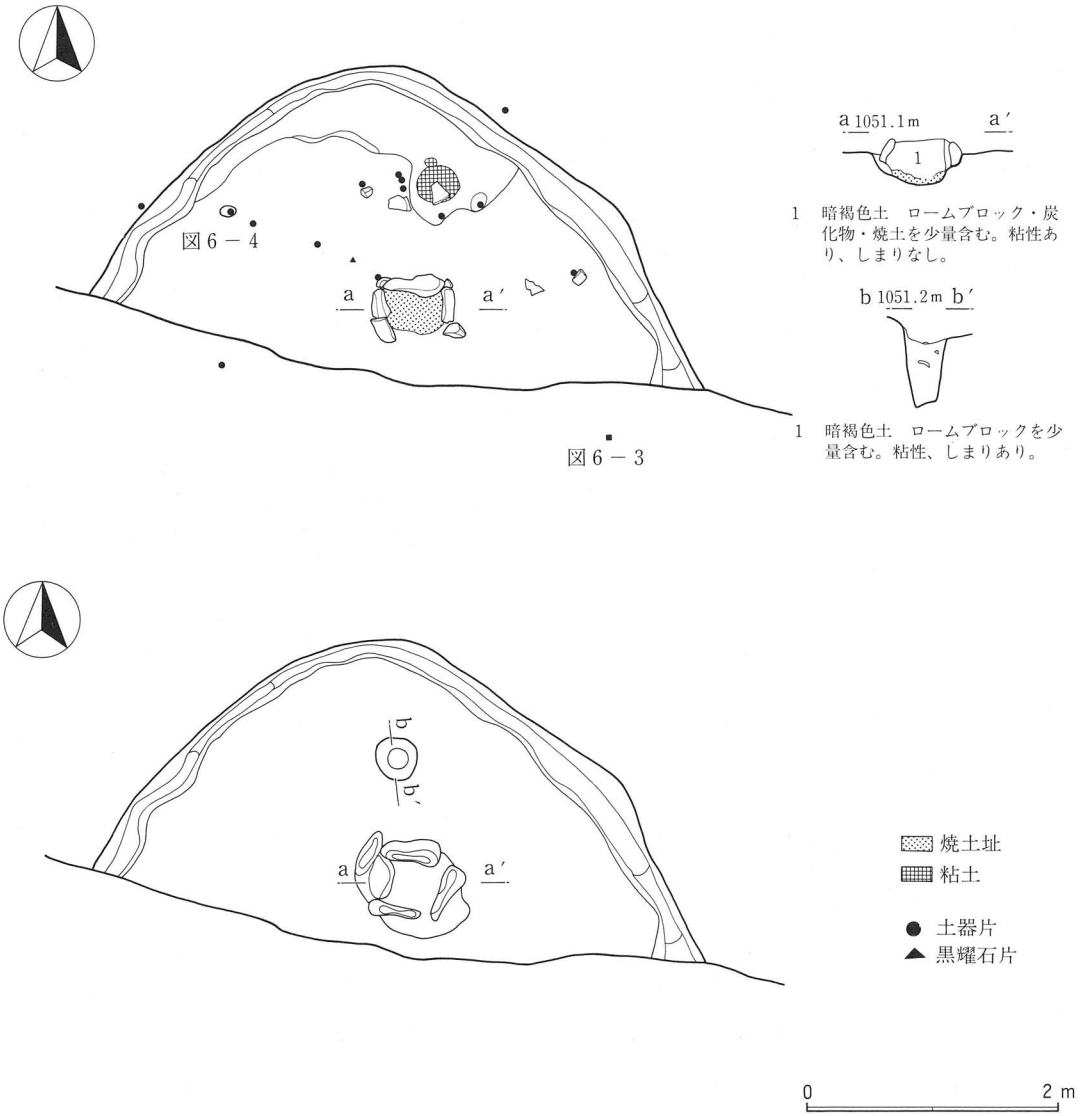
主柱穴と考えられるものはP_1が北側コーナー部分よりやや内側に入った位置に検出された。深さは55cmで、しっかりした掘り方で直に近い立ち上がりを持つ。P_1の上面にはパミスを含む火山堆積物が風化して粘土化した土層が34cm×30cmの範囲に認められた。柱穴上に堆積されていた点より、本址の廃絶時にこの土層が投げ込まれたものとも考えられる。P_1内深さ19cmより中期後半曽利Ｖ式期の同一個体の深鉢大破片が傾いて検出された。

ローム面を直接床としており、全面が堅緻であった。P_1周辺の102cm×50cmの範囲が他の面よりもやや高まりを持っていた。

炉址は住居址中央部より、やや奥壁によった位置に構築されている。石囲い炉址で、南辺の炉石が欠落している他は完存し、全体的にしかっりした組み方がなされていた。平面形は東西方向にやや長い不整方形を呈し、奥壁部に当たると思われる、北側辺の炉石は長さ50cmの板状の大きな安山岩をほぼ垂直に立てている。他の辺に用いられている炉石は奥壁部に較べ、小形で棒状の安山岩が使用されている。なお、西辺の炉石は加熱により破損している。北東・北西側には小礫が認められ、これらは炉石の固定のために詰め込まれたものである。炉址の掘り方は88cm×64cmの不整楕円形であり、この掘り方の外周には炉石を固定したと思われる溝状の掘り方が検出されている。炉内には焼土が堆積し、炉底には厚さ５cmの焼土が堆積している。炉の軸線は本来住居址主軸線と同一の方向をとるのが一般的であるが、本跡の炉の軸線は住居址の軸線に対し約44°北側に振れている状況である。

本址からの遺物は、覆土内より検出され、これらの平面分布を見た場合、北側の範囲に散布する状況が見える。ほとんどが土器片であるが、第６図２の打製石斧の破片（３）、凹石（４）、黒耀石石核（５）や、黒耀石の剥片などの石器類も出土している。土器は第６図１の沈線によって区画された中に矢羽状の沈線が施されたものと、２の沈線によって区画され、その中を縄文が施されたものがある。１は曽利系の土器であり、２は加曽利Ｅ系の土器であると考えられる。

本址の時期は出土遺物より縄文中期後半と考えられる。



第5図　A区1号住居址（1/60）

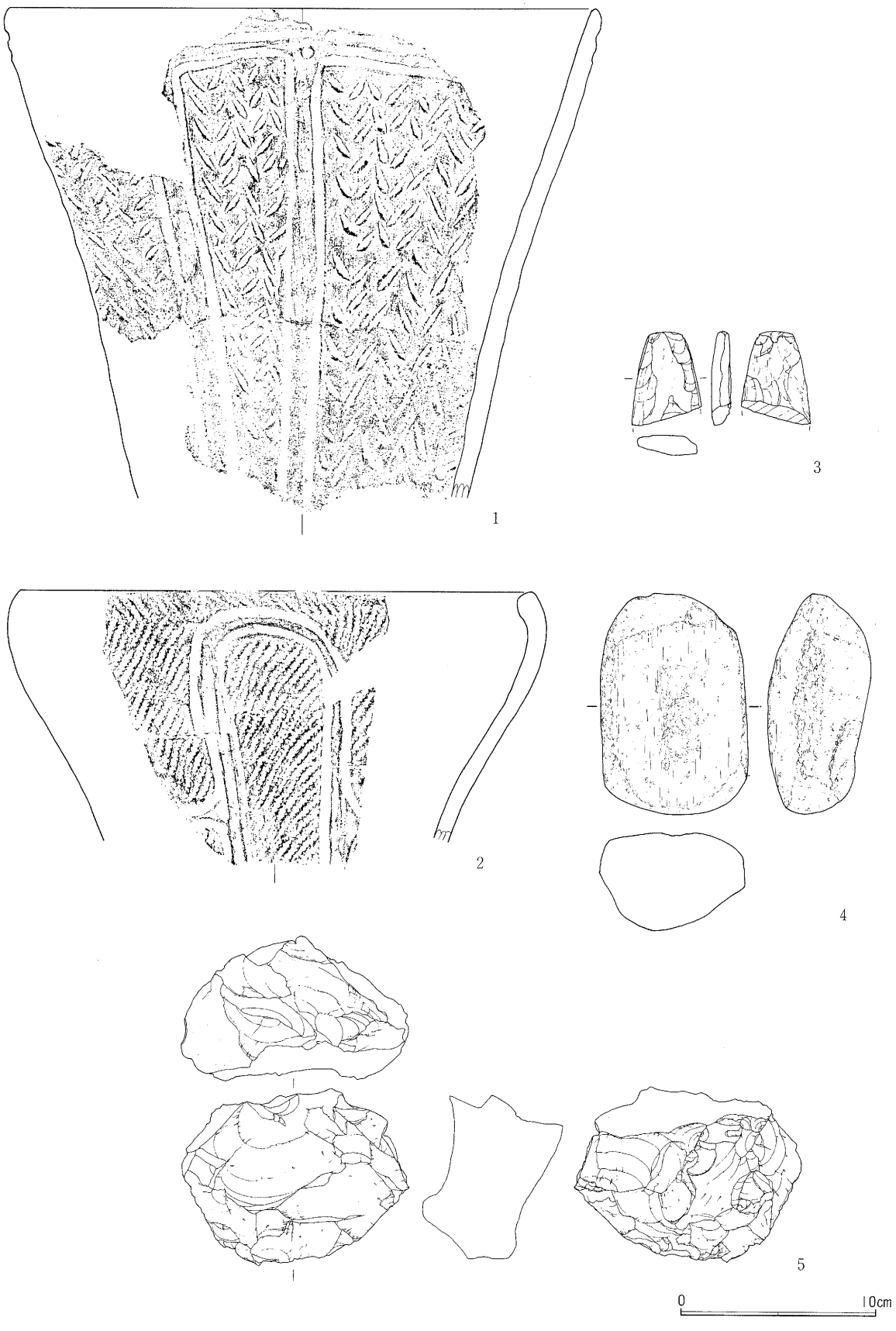
1号方形柱穴列（第7図、図版1－7）

A区b－15･16グリットを中心とする位置に構築されている。

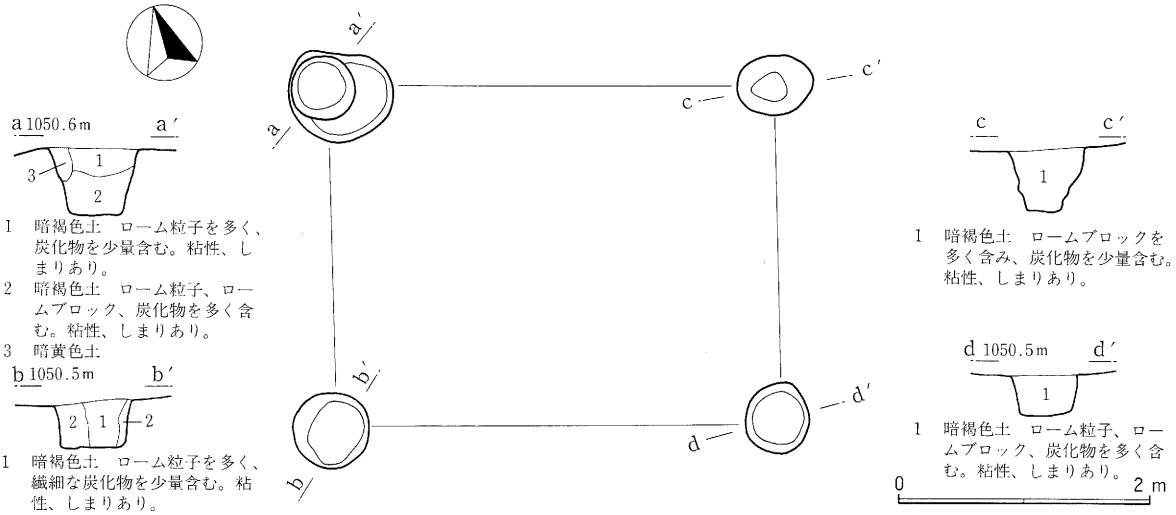
本址の平面形は長方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、長辺となる北辺が3.60m、南辺が3.50m、短辺となる東辺が2.68m、西辺が2.74mを測る。各辺とも均等の長さである。面積は約9.62m²を測る。東から西の方向へ長軸をもち、長軸方向はN－75°－Eを示す。

柱穴はP_1からP_4の4本で構成される。柱穴の平面形すべてが円形といえるが、P_1の平面形は不整形であるが、底面型は円形となっている。確認面からの柱穴の深さは、P_1が53cm、P_2が36cm、P_3が49cm、P_4が32cmで、4本の平均は約42.5cmである。南辺の柱穴は急な斜面に構築されているため、北辺の柱穴に較べると浅くなっている。土層は単一層のものが多いが、P_2では土層で柱痕を確認することができた。

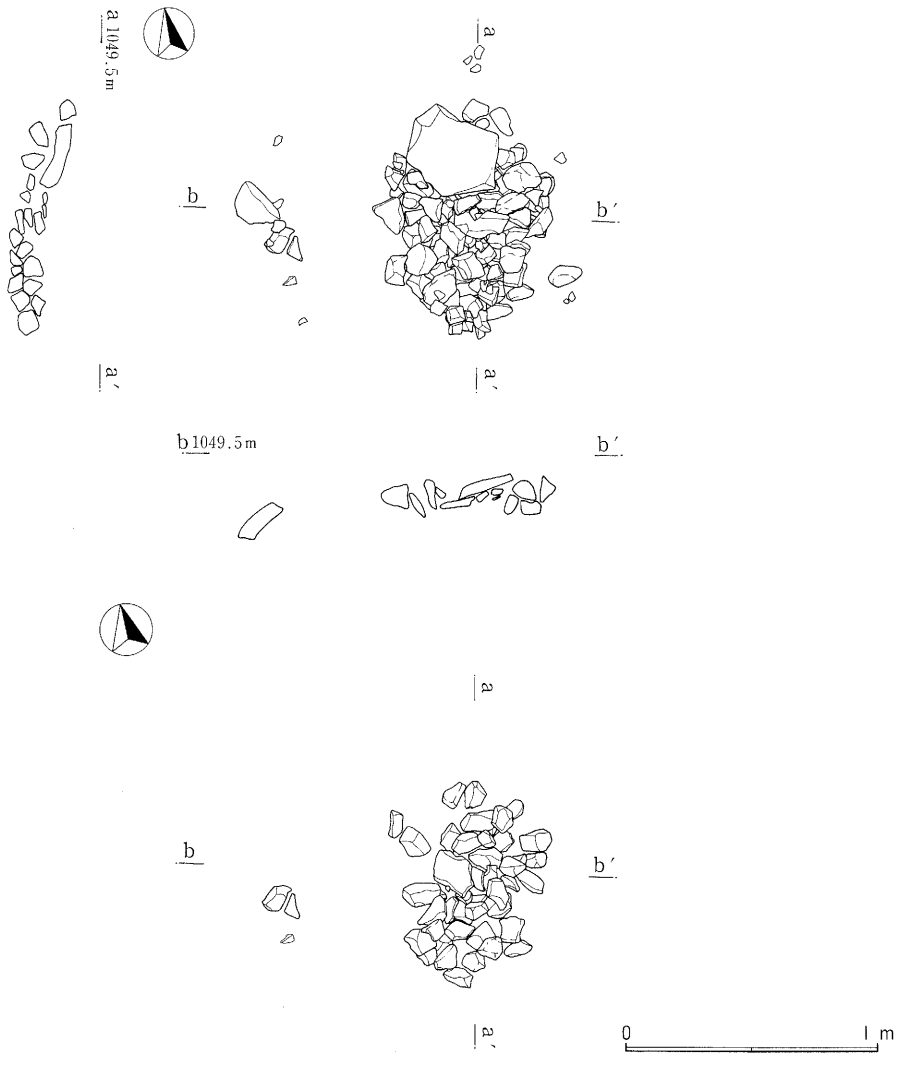
遺物は確認できなかったが、土層と周囲から出土した遺物から考えると、縄文時代中期後半の遺構であると考えられる。



第6図　A区1号住居址出土遺物（1/3）



第7図　A区1号方形柱穴列（1/60）



第8図　A区集石（1/30）

集石（第４・８図、図版１－８）

Ａ区b－13グリットの西に寄る位置で検出された。図４を見ると第１層の黒色土中より検出された。平面形は長楕円形で長軸95cm、短軸72cmを測る。石は24cmの高さで、約２段にわたって積まれている。集石に使用されている石は、ほとんどが拳大の安山岩が使用されているが、中には黄色の軽石が使用されている例が見られる。また、全体に焼成を受けていた。一つだけ42cmの大きな安山岩が最上部にある。石をすべて取り上げると60cmの範囲で炭化物が散布していた。

集石の内部からは遺物は検出することはできなかったが、周囲より縄文時代中期後半の土器片が散布しているため、この時期の遺構であることが考えられる。

23号土坑（第９図１）

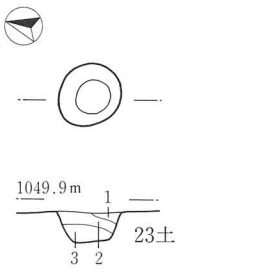
Ａ区の土坑は平成６年度の調査区との関連により土坑番号を継続番号とした。Ａ区b－14グリットに位置する。長径53cm、短径48cm、深さ23cm、平面形は円形で、ピット状の土坑である。内部より遺物の出土はないが、土層と周辺より出土している遺物より縄文時代中期後半の土坑であると考えられる。

焼土址１（第９図２、図版２－１）

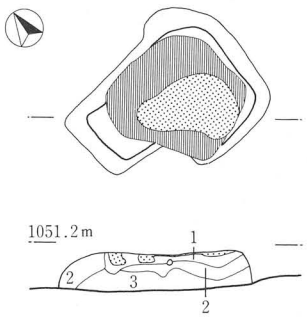
Ａ区c－14グリットの北寄りに位置する。83cm×43cmの範囲で焼土が検出された。また、焼土の周囲より111cm×950cmの範囲にわたって焼土の散布する。同レベルより多量の縄文時代中期後半の土器片が検出されており、本址は遺物の包含層中に含まれる遺構であるといえる。よって時期も同時期であると考えられる。

焼土址２（第９図３、図版２－２）

Ａ区b－４・５グリットの北寄りに位置する。22cm×18cmの範囲で焼土が検出された。同レベルより第22図３の黒色土器高台付坏他、土師器坏や灰釉陶器碗といった数点の平安時代の土器片が検出された。本址は道路敷のすぐ脇より検出されたため、周囲は撹乱をひどく受けていた。住居址のカマド火床部である可能性が考えられる。

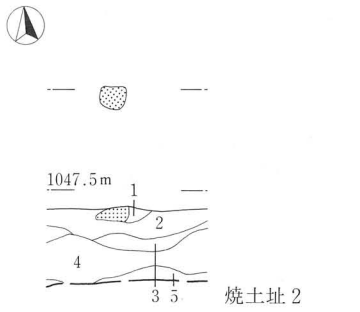


1　黒色土　ローム粒子を多く、炭化物を少量含む。粘性あり、しまり弱い。
2　暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
3　暗褐色土　ローム粒子、炭化物を少量含む。粘性、しまりあり。



焼土散布

1　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。粘性あり、しまりなし。
2　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。粘性、しまりあり。
3　暗黄褐色土　ローム粒子を多く含む。粘性、しまりあり。



1　黒色土　ローム粒子を微量、焼土粒子を少量含む。粘性あり、しまりなし。
2　黒色土　ローム粒子を少量含む。粘性は弱く、堅くしまる。
3　暗褐色土　ローム粒子を少量含む。粘性、しまりあり。
4　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを少量含む。粘性、しまりあり。
5　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを多く含む。粘性、しまりあり。

0　2m

第９図　Ａ区検出遺構（1/60）

2．B区の遺構

B区からは平安時代の住居址１軒、焼土址１基、縄文時代の方形柱穴列１基、近世の掘立柱建物址１基、土坑30基が検出された。

第１号住居址（第11・12図、図版２－５・６）

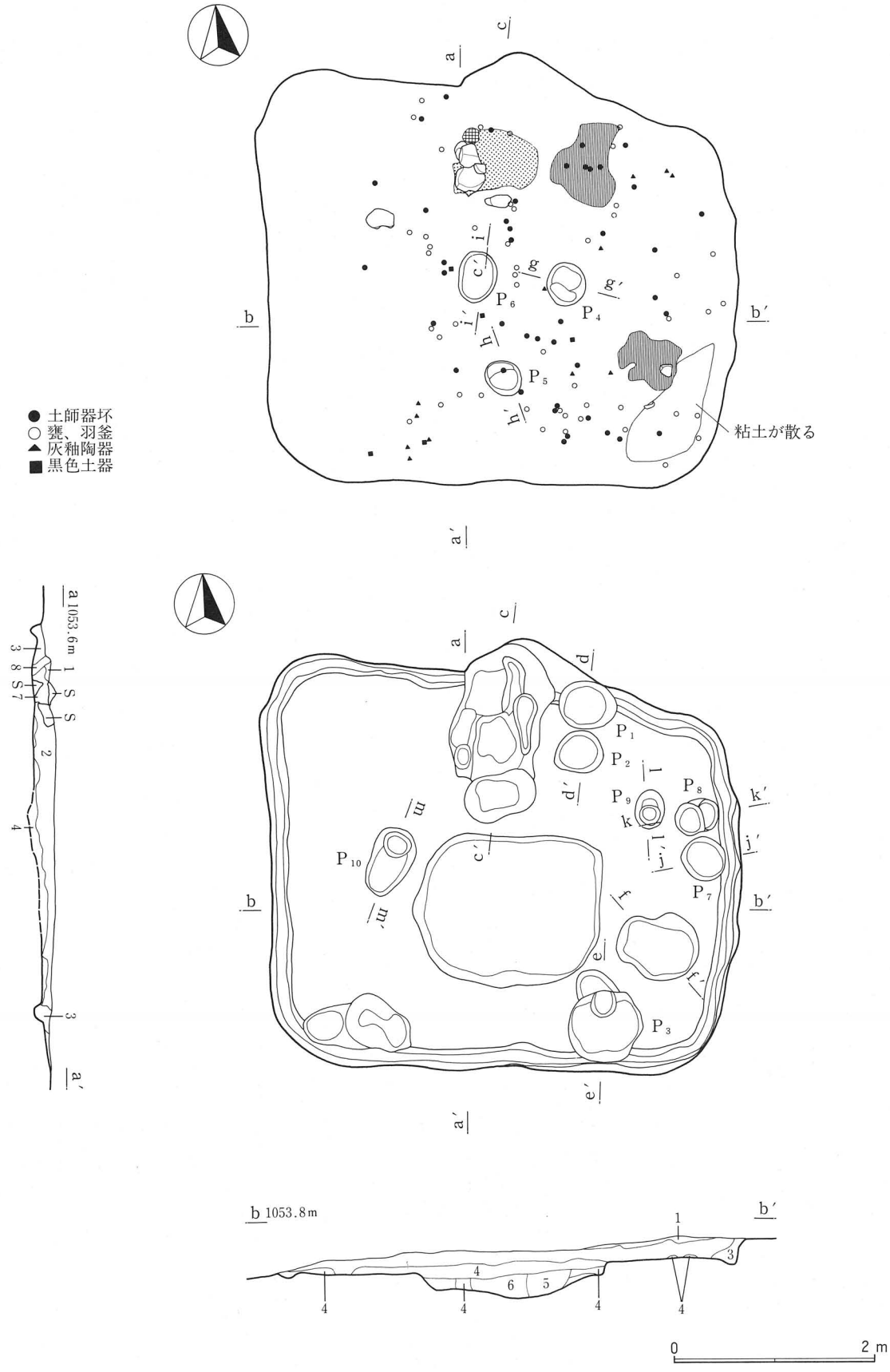
検出状況　長軸3.96m、短軸4.7m、平面形は隅丸長方形のプランを持つ住居址である。軸線方向はN－11.5°－Eである。壁は北側の一部が耕作による撹乱を受けている他は比較的しっかりしている。壁高は北壁12cm、東壁26cm、南壁17cm、西壁7cmで、地形に沿って西壁が低く残存状況は悪い。壁際より周溝が検出され、全周している。

土層は８層に分層できた。１層は暗褐色土で少量のローム粒子を含み、粘性が弱く、しまりがない。耕作土と考えられる。２層は暗褐色土で、少量のローム粒子を含み、粘性があり、しまりがある。一部に焼土の散る所が見られる。３層は暗褐色土でローム粒子を多く含み、粘性としまりがある。４層は暗茶褐色土で少量のローム粒子を含み、粘性があり、しまりは弱い。５層は暗褐色土でローム粒子を多く、10mm大のロームブロックを少量、２mm大の炭化物を少量含む。粘性がありしまりはやや弱い。６層はローム粒子が多く10mm大以下のロームブロックを多く含む。粘性があり、しまりは弱い。５・６層は床下土坑と考えられる。７層は暗褐色土で焼土粒子を多く、炭化物を少量含み、ローム粒子を多く含む。粘性がありしまりは堅い。カマドの一部と考えられる。８層はローム粒子が多く、粘性はあるがしまりはない。

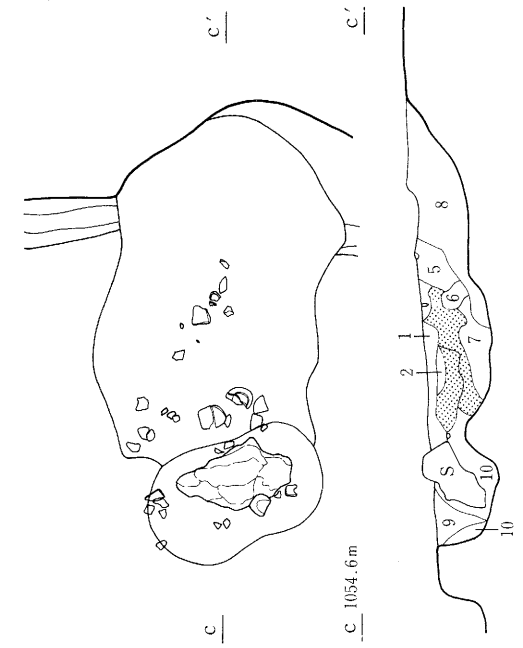
カマドは住居址の北側のほぼ中央に位置する。住居址の壁をカマドの全長の約1/4掘り込んで構築されている。カマドは原形を止めてはいないが、周辺に石や粘土の散布が見られることから、石組粘土カマドであると考えられる。煙道は明確ではないがカマドの構造より奥より急角度に壁際に上がり、住居の外に煙が排出されていたことが考えられる。カマドに堆積する焼土の厚さは、10cmである。カマドの前の部分には穴があり、47cmの大きく黄色の軽石状の礫と土器片が数点出土している。カマドの土層は10層に分層できた。１層は黒色土でローム粒子を少量含み、５mm大の炭化物を少量含む。粘性、しまりなし。２層は暗褐色土でローム粒子を多く、焼土粒子、粘土粒子と20mm大の粘土ブロックを少量含む。３層は橙色の焼土で締まりが堅く粘性がある。４層は赤色の焼土で、締まりが堅く粘性がある。５層は赤褐色土でローム粒子と粘土粒子を少量含む。６層は暗褐色土でローム粒子を多く含み、焼土粒子を少量含む。軟らかく粘性あり。７層は暗褐色土でローム粒子を多く含み、20mm大のロームブロックを稀に焼土粒子を少量含む。８層は暗黄褐色土でローム粒子を多く、30mm以下のロームブロックを少量含み、粘性としまりがある。

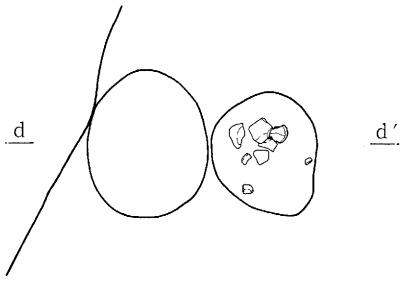
東壁のやや南寄りに焼土址が検出された。この焼土址は３cmの厚さを持つ焼土である。前述のカマド以前に使用されたカマドとも考えられるが、壁面よりやや内側にあり、煙道もなく、拡張前のプランを確認することができなかったため、カマドとはしなかった。焼土址を掘りあげると20cm大の長方形の礫が地山に突き刺さるように検出している。焼土址とP_1の間には灰や焼土の散布が見られるため、焼土址の灰はここに書き出されたものであると考えられる。

床下土坑は12基検出している。柱穴は明確ではないが、柱穴と考えられるものに、P_2・P_3・P_4・P_5・P_6・P_7・P_8・P_9・P_{10}が考えられる。しかし、本数が多いためすべてが柱穴とは考えにくい。P_1は多くの土器片や焼土が検出されているため、焼土址の灰掻き穴であったことが考えられる。P_{11}は焼土などが散布している下部より検出され、底面が明らかでない土坑であるが、中より土器片を多く検出した。また、灰の検出が見られるため、灰掻き穴として使用された可能性がある。

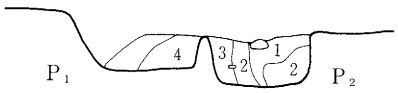


第10図　B区１号住居址（1/60）

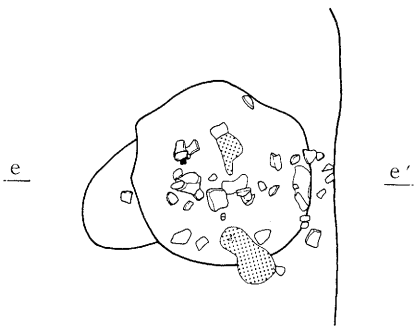


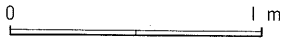


d 1053.7m d′

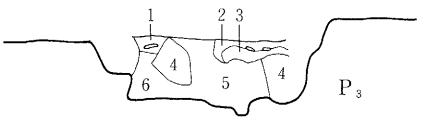


1 暗黄褐色土　ローム粒子を多く、ロームブロックを少量含む。粘性、しまりあり。
2 暗褐色土　ローム粒子を少量、30㎜大の炭化物を稀に含む。
3 暗黄褐色土　ローム粒子を少量、10㎜大の炭化物を稀に含む。粘性あり、しまりなし。
4 暗褐色土　ローム粒子を多く、10㎜大のロームブロックを少量含む。粘性、しまりあり。





e 1053.7m e′

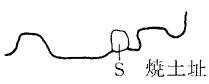


1 暗褐色土　ローム粒子多く、炭化物を少量含む。
2 黒色土　焼土粒子を少量含む。しまりなし。
3 暗赤褐色土　焼土粒子を多く含む。しまりなし。
4 暗褐色土
5 暗褐色土　灰を少量含む。しまりなし。
6 暗黄褐色土

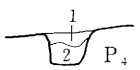
f 1053.7m f′

1 暗褐色土　ローム粒子と焼土粒子、20㎜大の炭化物を少量含む。堅緻。
2 明褐色土　焼成を受けた土。

f 1053.7m f′

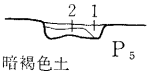


g 1053.7m g′



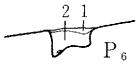
1 暗褐色土　60㎜大のロームブロックを含む。
2 暗褐色土

h 1053.7m h′



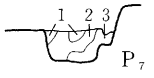
1 暗褐色土
2 暗黄褐色土　2㎜大の炭化物を少量含む。

i 1053.7m i′



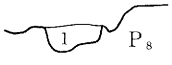
1 黒色土　しまりなし。
2 暗褐色土

j 1053.7m j′



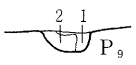
1 黒色土
2 暗黄褐色土　ローム粒子を多く含む。

k 1053.7m k′



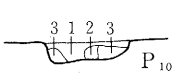
1 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。

l 1053.7m l′



1 暗褐色土
2 暗黄褐色土

m 1053.7m m′



1 暗褐色土
2 暗黄褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり弱い。
3 暗黄褐色土

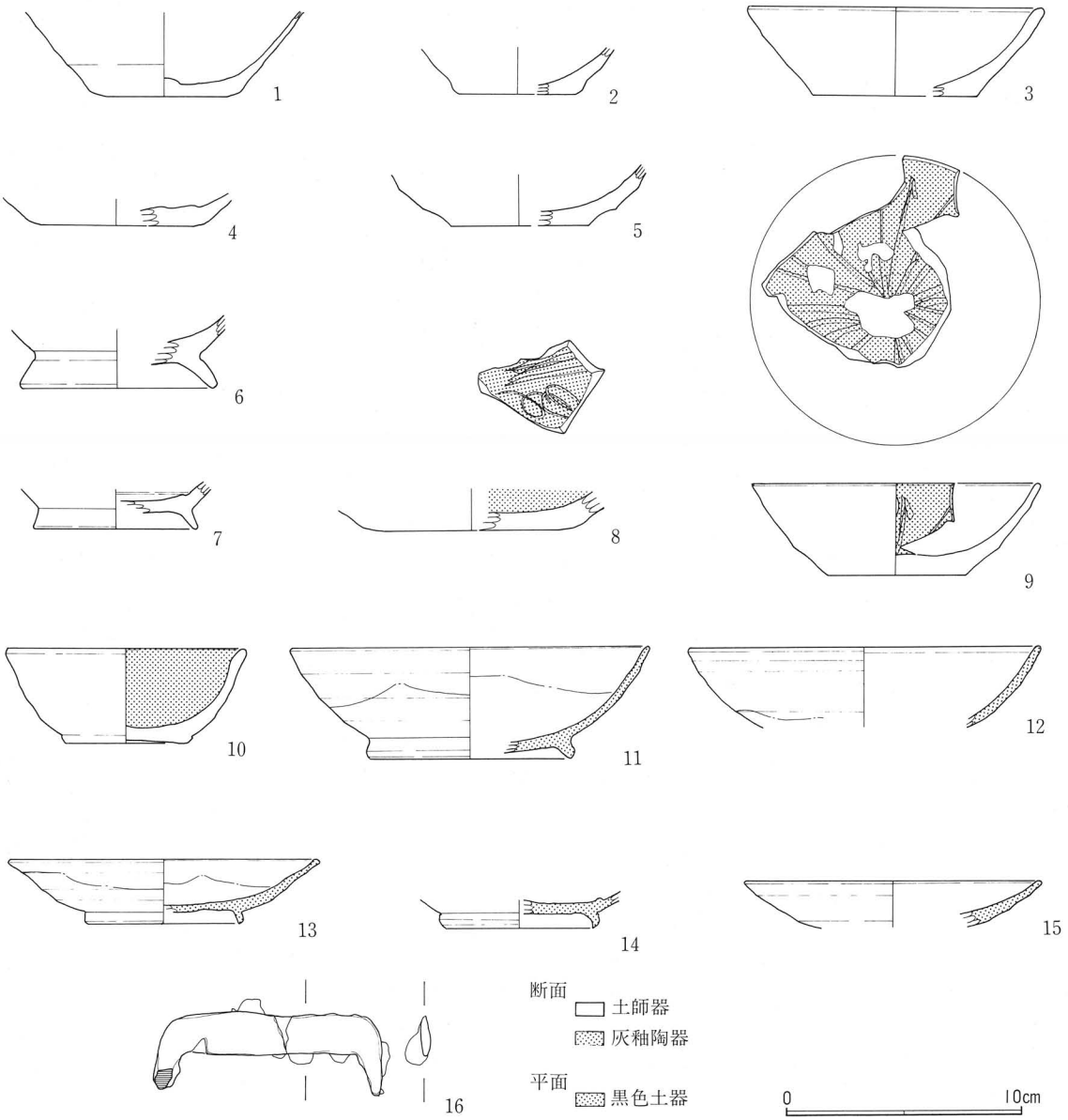
第11図　B区1号住居址（カマド・P_1～$P_3$1/30，焼土址・P_4～P_{10}1/60）

遺物の出土状況　遺物は住居址に広く散布している。特にカマド内やその周辺やP_1やP_9の周辺で多く検出されている。供膳具は土師器坏11個体以上、高台付坏２個体以上、黒色土器坏３個体、灰釉陶器碗２個体以上、皿３個体以上、煮沸具は羽釜と長胴甕の破片が出土しているが、復元できるものはない。その他に焼土址の南側から灰や焼土の散布している中より麻皮剝器が出土した。

土師器坏、高台付坏は、ほとんどが焼成が良好なものが多く、しっかりしている。胎土中に長石などを含むものは少ない。成形はいずれも回転轆轤引きで、底部すべてに糸切り痕が残っている。高台付坏は付け高台である。

黒色土器は坏のみ出土し、高台付坏や皿は見ることができない。図示した資料以外の破片は少なく、いずれも同一個体と考えられる。暗文が施されていものが多い。

灰釉陶器は、いずれも胎土中に不純物をほとんど含まず、色調は白色から明るい灰色である。底部の糸切り痕は整形され、残っていない。13のみが、糸切り痕が残る。釉薬はすべて漬け掛けである。



第12図　B区１号住居址出土遺物（1/3）

方形柱穴列（第13図、図版２－７）

Ｂ区c－4グリットの北寄りに位置している。

本址の平面形は長方形を呈する。規模は柱穴の中心間で、長辺となる北辺が4.12ｍ、南辺が4.26ｍ、短辺となる東辺が3.10ｍ、西辺が3.06ｍを測る。面積は約12.9㎡を測る。東から西の方向へ長軸をもち、長軸方向はＮ－68°－Ｅを示す。

柱穴はP_1からP_6の６本で構成される。柱穴の平面形ほとんどが円形であるが、P_{13}の平面形は不整形である。確認面からの柱穴の深さは、P_1が32cm、P_2が28cm、P_3が30cm、P_4が44cm、P_5が30cm、P_6が38cmで、６本の平均は約34cmである。

遺物の出土が見られないため、帰属時期は明確ではないが、土層から縄文時代である可能性が考えられる。

掘立柱建物址（第14図）

Ｂ区c－３グリットに位置している。

本址の平面形は方形を呈する。柱穴の間隔は、北辺1.50ｍ、南辺1.54ｍ、東辺1.76ｍ、西辺1.64ｍを測る。面積は2.584㎡である。長軸方向はＮ－10°－Ｅである。柱穴はP_1からP_4の４本で構成される。柱穴はすべて円形である。

遺物の出土がないため、明確な時期は不明であるが、土層が漆黒土であるため、近世以降の遺構であろう。

焼土址（第16・22図、図版２－８）

Ｂ区b－３グリットに位置している。25cm×22cmの範囲で焼土が検出された。焼土の周辺より平安時代の遺物が出土している。遺物は第22図１の土師器坏、２の灰釉陶器の皿の他、黒色土器坏の破片も出土している。

土坑

発掘区のほぼ全域にわたって検出されている。土坑番号については、番号を付した後に人為的に構築された土坑でないと判断し削除したものもあり、また、方形柱穴列などの柱穴となったものもあるために、土坑の番号は連続していない。

１号土坑（第15図、図版３－１）　長径138cm、短径120cm、深さ102cmで、大型の土坑である。主軸方向はＮ－53°－Ｗを示す。平面形は楕円形で、断面形は樽状である。掘り方はかなりしっかりとしている。底面は平坦である。土坑の底面より第21図１の縄文時代中期後半の土器片の他、同時期の土器片及び、黒耀石の細片が出土している。

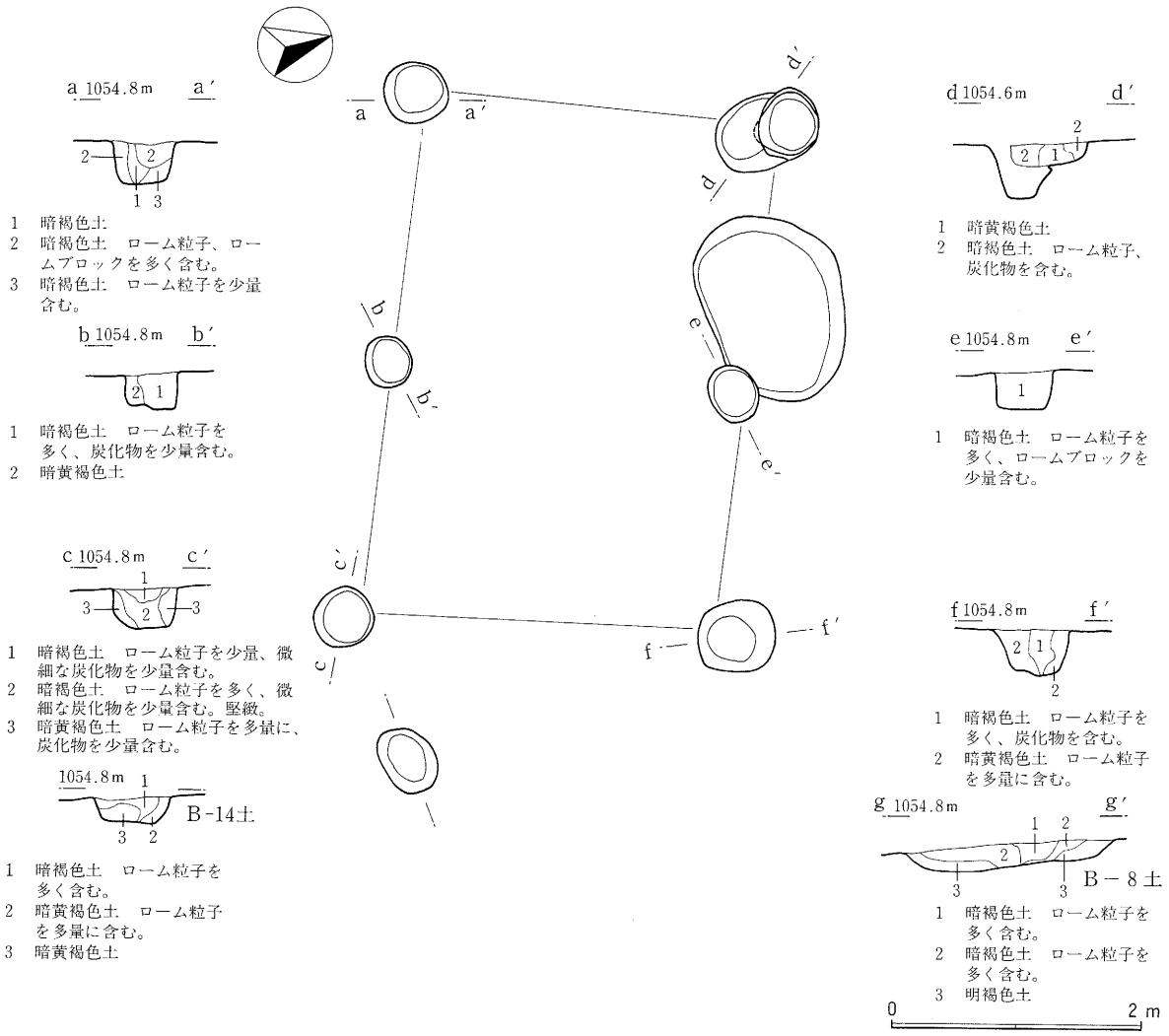
３号土坑（第15図、図版３－２）　長径92cm、短径86cm、深さ41cm、主軸方向はＮ－０°を示す。平面形は隅丸方形で、断面形は樽状である。掘り方はしっかりしている。底面は平坦である。

４号土坑（第15図、図版３－３）　長径148cm、短径134cm、深さ74cmの大型の土坑である。主軸方向はＮ－22°－Ｅを示す。平面形は楕円形で、断面形は一部巾着状となっている。掘り方はかなりしっかりしている。

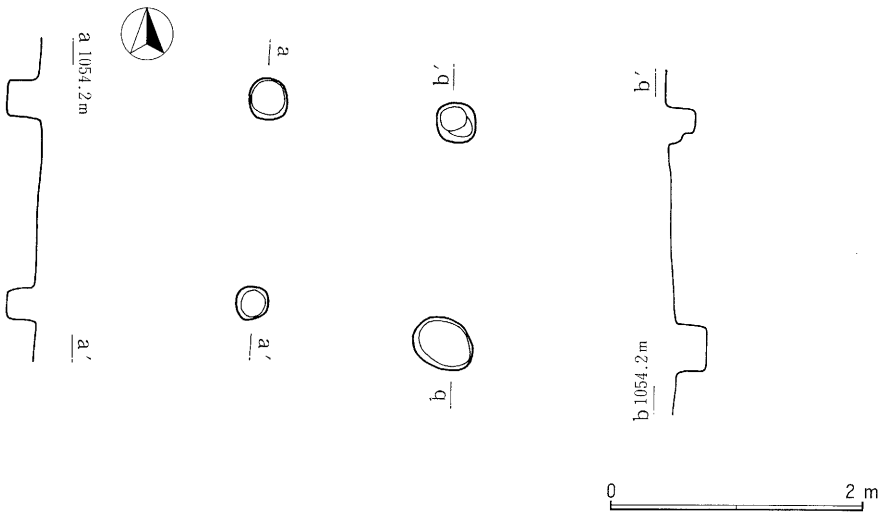
５号土坑（第15図）　長径112cm、短径110cm、深さ28cm、主軸方向はＮ－71°－Ｅを示す。平面形は不整円形で、断面形は皿状である。

６号土坑（第15図）　長径102cm、短径80cm、深さ27cm、主軸方向はＮ－55°－Ｅを示す。平面形は楕円形で、断面形は盥状である。

７号土坑（第13図）　１号方形柱穴列のP_4と重複している。P_4より新しい土坑と考えられる。深さは17cm



第13図　B区1号方形柱穴列（1/60）



第14図　B区掘立柱建物址（1/60）

で、平面形は不整円形で、断面形は皿状である。

8号土坑（第13図）　長径157cm、短径115cm、深さ20cm、主軸方向はN－80°－Eを示す。平面形は不整形で、断面形は皿状である。

14号土坑（第13図）　長径58cm、短径42cm、深さ19cm、主軸方向はN－65°－Eを示す。平面形は楕円形で、断面形は皿状である。

15号土坑（第15図）　長径46cm、短径40cm、深さ29cm、主軸方向はN－0°を示す。平面形は不整形で、ピット状である。

16号土坑（第15図）　長径65cm、短径58cm、深さ18cm、主軸方向はN－0.5°－Eを示す。平面形は円形で、断面形は盥状である。

17号土坑（第15図）　長径115cm、短径62cm、深さ26cm、主軸方向はN－35°－Wを示す。平面形は不整形で、断面形は盥状である。

18・19号土坑（第15図）　18号土坑は推定であるが、長径160cm、短径100cm、深さ20cm、軸線方向はN－41°－Wを示す。平面形は楕円形で、断面形は皿状で、あまり掘り方のしっかりしていない土坑である。19号土坑を掘り込んで構築されている。19号土坑は掘り方がとても曖昧である。深さは18cmで平面形は不整形で断面形は皿状である。ロームマウンドの可能性も考えられる。

20号土坑（第15図）　長径82cm、短径67cm、深さ20cm、軸線方向はN－88°－Eを示す。平面形は楕円形、断面形は盥状である。

22号土坑（第15図）　長径77cm、短径65cm、深さ37cm、主軸方向はN－7°－Wを示す。平面形は不整形で、断面形は盥状である。

23号土坑（第15図）　長径65cm、短径58cm、深さ18cm、主軸方向はN－36°－Wを示す。平面形は円形で、断面形は盥状である。

24号土坑（第15図）　長径120cm、短径83cm、深さ32cm、主軸方向はN－62°－Wを示す。平面形は長楕円形で、断面形は盥状である。

25号土坑（第15図）　長径53cm、短径51cm、深さ14cm、主軸方向はN－43°－Eを示す。平面形は円形で、断面形は皿状である。

26号土坑（第16図）　長径104cm、短径94cm、深さ32cm、主軸方向はN－59°－Wを示す。平面形は不整形で、断面形は皿状である。

27号土坑（第16図、図版3－4）　長径95cm、短径79cm、深さ27cm、主軸方向はN－8°－Wを示す。平面形は楕円形で、断面形は盥状である。

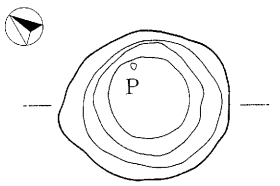
28号土坑（第16図）　長径73cm、短径55cm、深さ30cm、主軸方向はN－38°－Wを示す。平面形は楕円形で、断面形は盥状である。

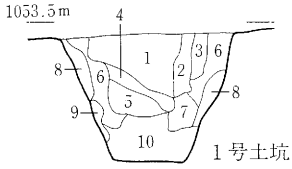
29号土坑（第16図）　長径153cm、短径89cm、深さ27cm、主軸方向はN－36°－Wを示す。平面形は不整形、断面形は盥状である。

30号土坑（第16図）　長径66cm、短径57cm、深さ28cmを測り、主軸方向はN－9°－Eを示す。平面形は不整形で、断面形は盥状である。

31号土坑（第16図、図版3－5）　長径45cm、短径45cm、深さ26cmを測り、主軸方向はN－5°－Wを示す。平面形は円形で、ピット状の土坑である。

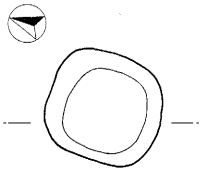
32号土坑（第16図）　長径80cm、短径64cm、深さ34cmを測り、主軸方向はN－30°－Eを示す。平面形は楕円形





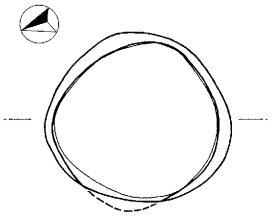
1 号土坑

1 暗褐色土　炭化物を微量に含む。堅緻。
2 暗褐色土　堅緻。
3 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。堅緻。
4 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
5 暗褐色土　ローム粒子を少量含む。堅緻。
6 暗茶褐色土　ローム粒子を多量に含む。堅緻。
7 暗褐色土　ローム粒子を多量に含む
8 暗褐色土　ロームブロックを多く含む。堅緻。
9 撹乱
10 暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。堅緻。



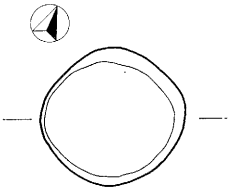
3 号土坑

1 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。堅緻。粘性なし。
2 暗褐色土　ローム粒子を多く、炭化物を稀に含む。粘性なし。堅緻。



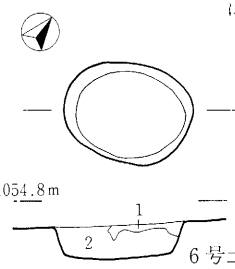
4 号土坑

1 暗褐色土　ローム粒子、炭化物を多く含む。
2 暗褐色土　ローム粒子を多く、炭化物を含む。
3 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に、炭化物を少量含む。
4 暗褐色土　ローム粒子、炭化物を少量含む。
5 暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを多量に、炭化物を多く含む。



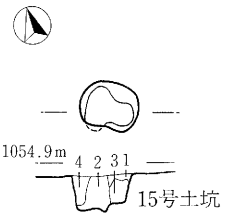
5 号土坑

1 暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
2 暗褐色土　しまりなし。
3 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
4 暗黄褐色土



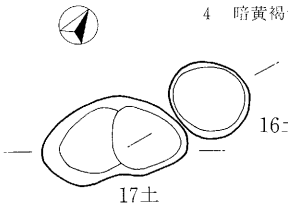
6 号土坑

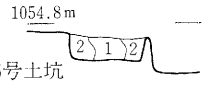
1 黒色土
2 暗褐色土



15号土坑

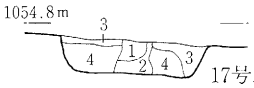
1 暗褐色土　ローム粒子、炭化物を少量含む。
2 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
3 暗褐色土　ローム粒子を多量に含む。
4 暗褐色土　ローム粒子を少量含む。堅緻。





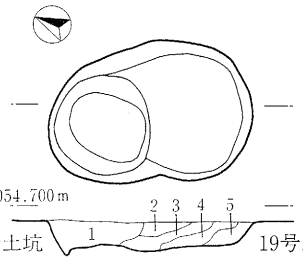
16号土坑

1 暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
2 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。



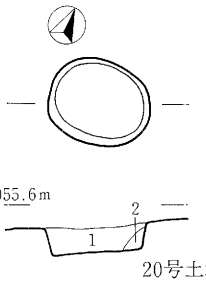
17号土坑

1 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
2 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。しまりなし。
3 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり弱い。
4 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまりなし。



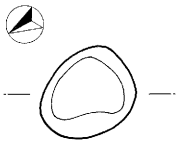
18号土坑　19号土坑

1 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまり弱い。
2 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。堅緻。
3 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。堅緻。
4 暗褐色土　ローム粒子を少量含む。堅緻。
5 暗黄褐色土　ローム粒子を多く含む。



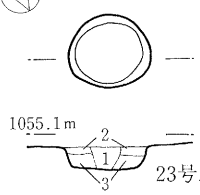
20号土坑

1 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。



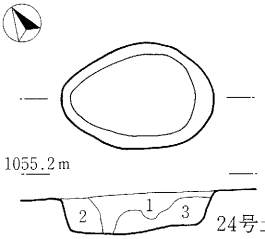
22号土坑

1 暗褐色土　ローム粒子を少量、炭化物を稀に含む。
2 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
3 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。しまりなし。
4 暗黄褐色土　ローム粒子を多量に含む。堅緻。
5 暗褐色土　ローム粒子を多く、炭化物を稀に含む。



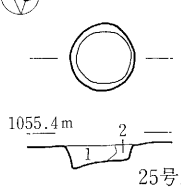
23号土坑

1 暗褐色土　ローム粒子を少量含む。
2 暗褐色土　ローム粒子を多く含む。
3 暗黄褐色土



24号土坑

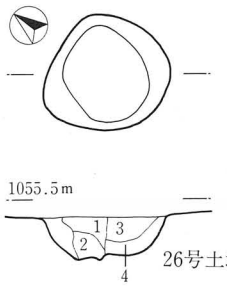
1 暗褐色土　ローム粒子を少量含む。堅緻。
2 暗褐色土　ローム粒子、5mm大のロームブロックを少量含む。堅緻。
3 暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを多く含む。堅緻。



25号土坑

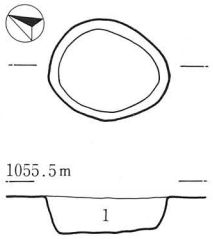
1 暗褐色土　ローム粒子を少量含む。粘性なし、堅緻。
2 暗黄褐色土

第15図　B区土坑1（1/60）



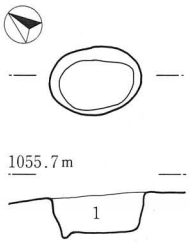
26号土坑

1 暗褐色土 炭化物を稀に含む。
2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く、炭化物を少量含む。
3 暗褐色土 ローム粒子を少量、微細な炭化物を稀に含む。
4 暗黄褐色土



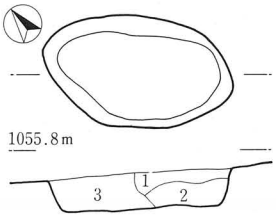
27号土坑

1 暗褐色土 ローム粒子を多く含み、炭化物を少量含む。



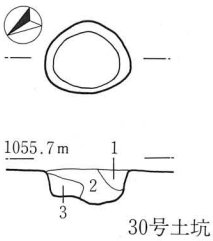
28号土坑

1 暗黄褐色土 ローム粒子を多く含む。



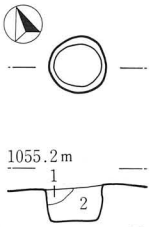
29号土坑

1 暗褐色土
2 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
3 暗褐色土 ローム粒子を多く、ロームブロックを少量含む。



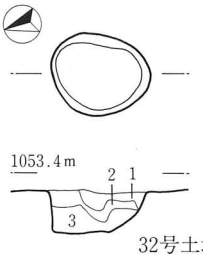
30号土坑

1 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
2 暗黄褐色土 ローム粒子を多く含む。
3 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む。



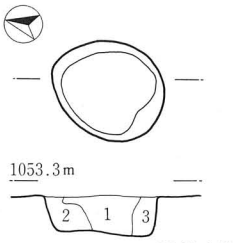
31号土坑

1 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまりなし。
2 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む。



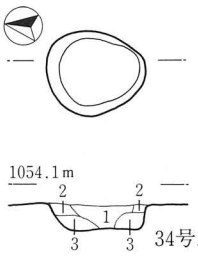
32号土坑

1 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。しまり弱い。
2 暗褐色土 ローム粒子を多く、炭化物を少量含む。
3 暗黄褐色土



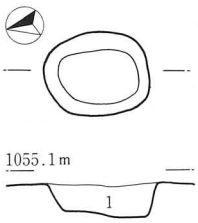
33号土坑

1 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
2 暗黄褐色土 ローム粒子を多く含む。



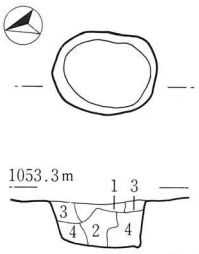
34号土坑

1 暗褐色土 ローム粒子を多く、炭化物を少量含む。しまり弱い。
2 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。
3 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む。



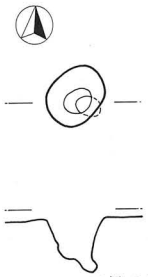
39号土坑

1 暗褐色土 ローム粒子を多く、炭化物を少量含む。しまり弱い。

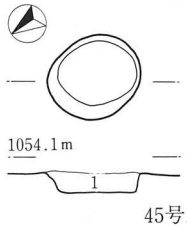


40号土坑

1 黒色土 炭化物を稀に含む。しまり弱い。
2 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。しまりなし。
3 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む。堅緻。

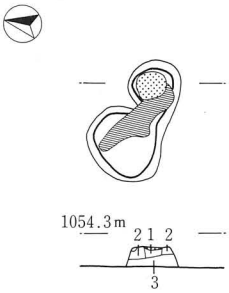


41号土坑



45号土坑

1 暗褐色土



1 黒色土 焼土粒子を多く含む。しまり弱い。
2 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。
3 暗黄褐色土 ローム粒子を多く含む。

第16図 B区土坑2および焼土址（1/60）

で断面系は不整形である。

33号土坑（第16図）　長径92cm、短径78cm、深さ31cmを測り、主軸方向はN－13°－Eを示す。平面形は楕円形で断面形は盥状である。

34号土坑（第16図、図版３－６）　長径78cm、短径67cm、深さ19cmを測り、主軸方向はN－０°である。平面形は不整形で、断面形は皿状である。

39号土坑（第16図）　長径82cm、短径57cm、深さ24cmを測り、主軸方向はN－０°である。平面形は隅丸長方形で、断面形は盥状である。

40号土坑（第16図）　長径72cm、短径56cm、深さ34cmを測り、主軸方向はN－８°－Wを示す。平面形は不整形で、断面形は盥状である。

41号土坑（第16図）　長径51cm、短径40cm、深さ44cmを測り、主軸方向はN－45°－Eである。平面形は楕円形で、ピット状の土坑である。

45号土坑（第16図）　長径75cm、短径65cm、深さ15cmを測り、主軸方向はN－15°－Eを示す。平面形は不整形で、断面形は皿状である。

以上の土坑は４群に分類することができる。

Ⅰ群　しっかりした掘り方を持ち、非常に深い土坑で、基本的には三角堆土である。断面形は樽状であり、口径に向かって開いている。この群は断面形と深さにより次の３類に分類できる。

１類　非常に深い土坑で、断面形が盥状の土坑である。土層は数層に分かれ、壁面が崩れたような土層が見られる。これらからもとは巾着状の土坑であった可能性があり、この特徴を持った土坑は１号土坑のみである。

２類　１類とほとんど同じ特徴を持つが、１類に較べて底部が広く、断面形が明確な巾着状である。この特徴を示すのは４号土坑である。

３類　掘り方がしっかりしているが、１・２類に較べると非常に規模の小さい土坑である。この土坑は１次調査で４類とした土坑である。本址では３・16・23・26・33・40号土坑がこれに当たり、菖蒲沢Ａ遺跡では多く見られる土坑である。

Ⅱ群　あまり掘り方がしっかりとしない、浅い土坑である。土層が基本的に１層である。これは断面形により２類に分かれる。

１類　断面形が盥状の土坑。６・17・20・24・27・28・39・45号土坑がこれに当たる。

２類　断面形が皿状の土坑。５・８・18・19・25・34号土坑がこれに当たる。

Ⅲ群　ピット状の土坑である。何らかの柱穴とも考えられるが、対応する土坑がないので、単独の土坑とも考えられる。14・15・30・31・41号土坑がこれに当たる。１次調査の報告書では５類に分類している。

土坑からは時期がわかる遺物の出土はほとんどなかった。わずか１号土坑が中期後半とわかっただけである。用途としては、５号土坑が形態から貯蔵穴として使用されていたのではないかと考えられるのみで、他の土坑の用途は全く不明である。１群３類は１次調査では、トーテムポール様の柱が立っていたのではないかと想定した。Ｂ区も同様な性格の土坑ではないかと考えられる。本址で特徴的なのは、掘り方のしっかりしない土坑群である。これらの土坑は掘る以前のプランはある程度わかるのだが、掘り進めていく内に壁が出ないというもので、人為的な土坑でないか非常に雑に作られた土坑であることが考えられる。

第３節　出土した遺物

１．縄文時代の遺物（第17～21図）

Ａ区での縄文時代の遺物は、住居址で出土している他はａ・ｂ－４・５・６グリットとｂ・ｃ－13・14・15グリットで多量の遺物の出土があった。時期は多岐にわたっており、以下に述べていくように縄文時代早期から後期初頭までの資料が出土している。中期後半の遺物は焼土址１や集石１に伴う遺物であったことも考えられる。

第17図１から10までは早期の押型文土器である。１から６までは山形文である。いずれも破片のため、全容はわからないが、１・２は横位に、４・６は縦位に、３は縦横位に施文されている。１と６は口縁部まで残っており、口縁部にまで山形文が施文されている。薄手の土器である。７から10は楕円文である。山形文に較べるとやや厚みのある土器である。第20図74の石器は三角形の断面を持ち、礫の縁辺が磨かれており、長編の断面に敲打痕が見られる。これらの形状と特徴から、早期に出土する特殊磨石であることが考えられる。これらの遺物はすべてａ・ｂ－４・５・６グリット付近で検出されている。当該時期の遺物は前回の調査でも検出されている。

11・12・13は微量な繊維を含む土器である。いずれも器面荒く、剥落が激しい。14・15・16・19・20は縄文を地文に持ち、胎土中に繊維を含むものである。17・18は複節の縄文である。繊維を含み、縄文を地文に持つことから前期初頭から前半の土器であると考えられる。図示はしなかったが、無文の指頭圧痕の残る中越式に比定できる土器も見られる。前期の土器は数量は少ないが、Ａ区全域にわたって検出されている。当該期の遺物は前回の調査では８号土坑より出土しており、中越式期の土器が出土している。

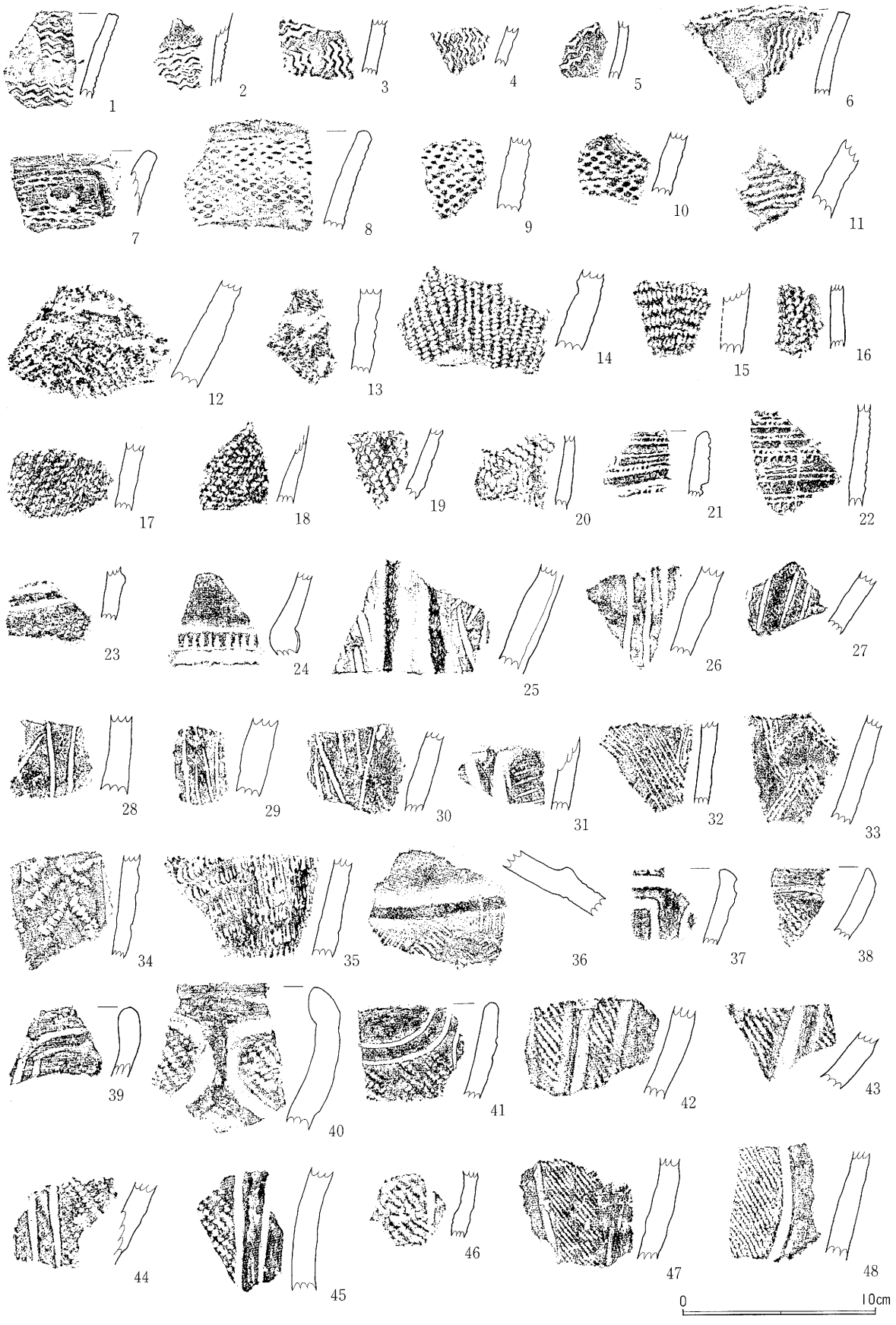
21・22の土器は薄手の土器で、半割竹管状工具による平行沈線を横位に用い、結節状沈線が加わる施文を持つものである。これにより、中期初頭の土器であることが考えられる。中期初頭の土器は、すべてｂ・ｃ－14・15より出土している。

23は胎土が堅く二条の沈線を持ち、24は胎土が堅く二条の平行沈線を横位に用い、沈線間のネガティヴな隆帯に連続爪形文を施文している。この二つの土器は中期中葉期であると考えられる。

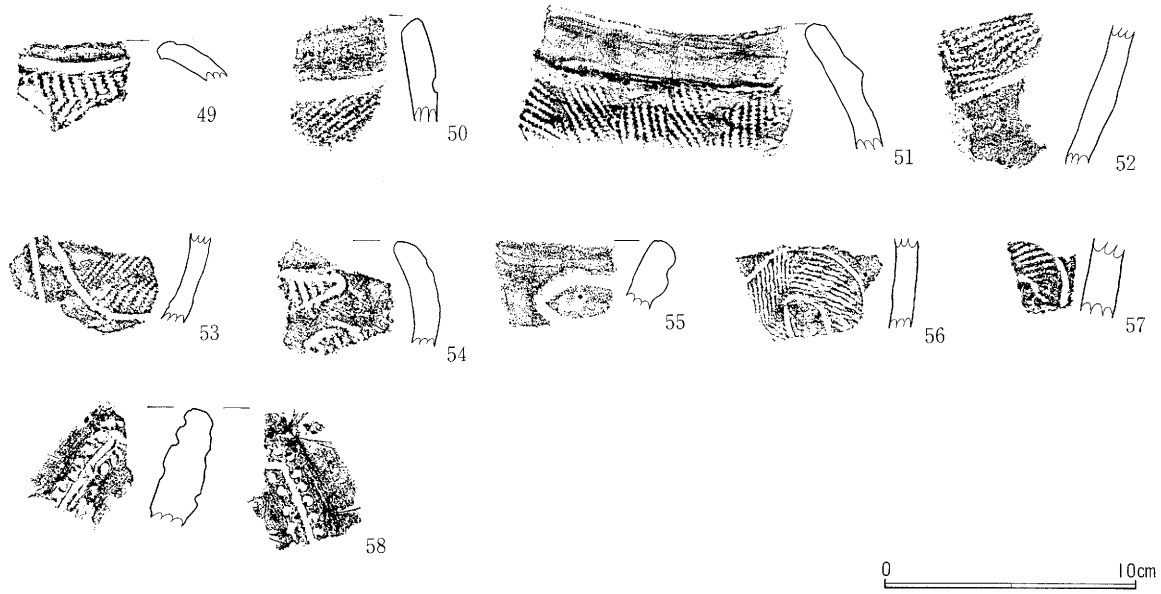
25から58までは中期後半の土器である。25は地文に矢羽状の沈線を施し、隆帯によって区画している。26・27・28・29・30は沈線を縦または斜めの方向に用いたもので、矢羽状沈線の一種ではないかと考えられる。31は沈線によって区画し、その内部に横位の短い沈線を施文したものである。32・33は細い条線を用いたものである。33は三条の条線による矢羽状沈線である。34も矢羽状沈線の影響を受けたものと考えられ、刺突によって矢羽状の模様を作り出しているものである。35は器面のほぼ全面に細かい列点施文したものである。36は地文に細かい沈線を施し、低い隆帯で上面を区画している。以上の土器群は沈線を主体とする一群である。

38から54までは沈線による区画を持ち、その内部に縄文を充填させるものである。50は全面に縄文を施し、口縁部付近を低い隆帯で区画し、口縁部を無文とするものである。以上の土器群は縄文を主体とする一群である。前者は曽利系の土器であり、後者は加曽利Ｅ系の土器と考えられる。これらの遺物は以上に述べた特徴から曽利Ⅳ式期からＶ式期のものと考えられ、住居址の時期と一致している。また、検出範囲はＡ区全面である。以上の遺物の他に、58が出土している。これは土器の把手であり、中央に沈線を施文し、沈線の両側に刺突を施している。当該期の遺物は前回の調査でも遺構外で検出されている。

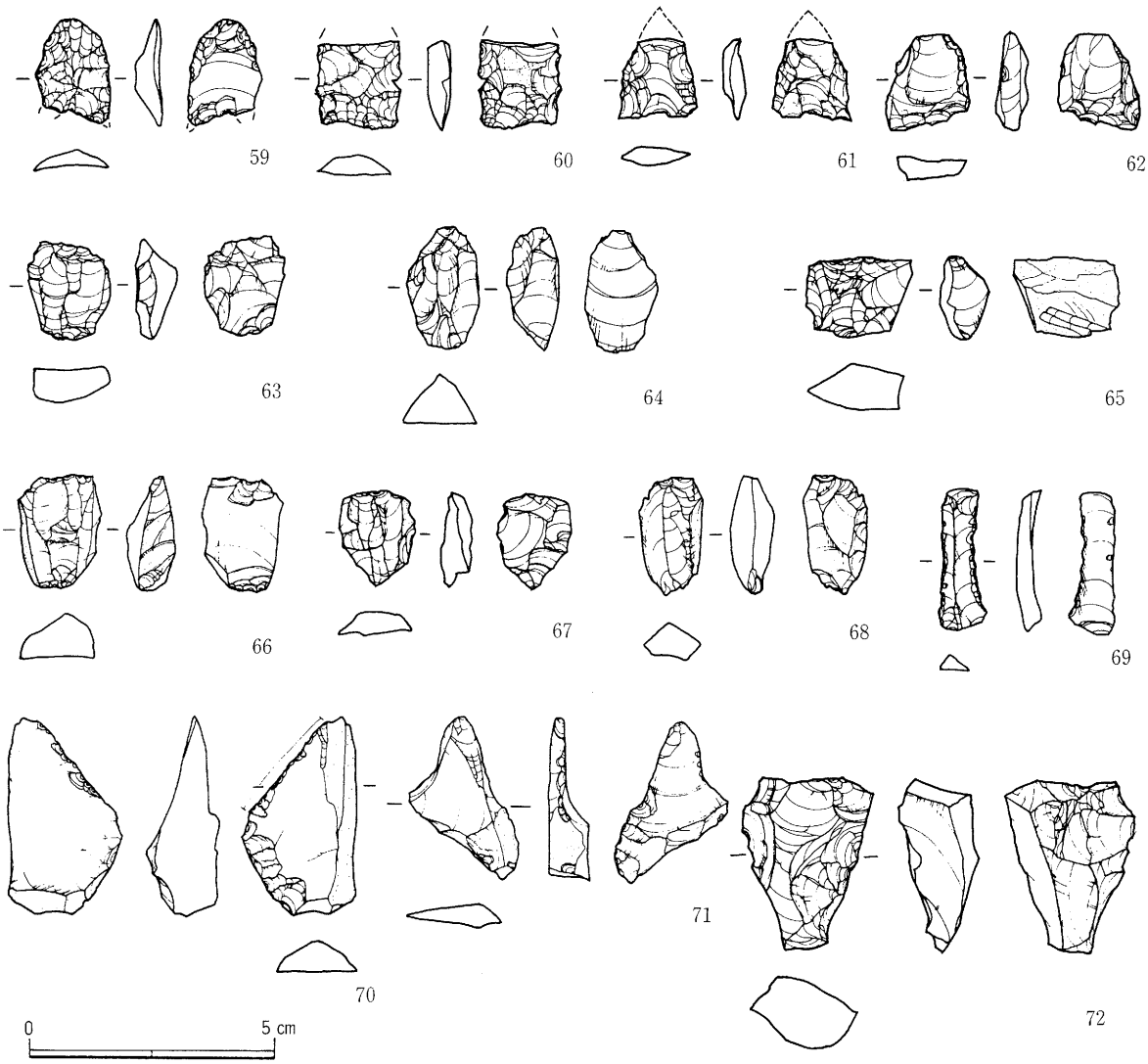
56・57は細い曲線の沈線の中に縄文を充填するものである。細かい破片なので全体像は不明であるが、曲線が逆「Ｊ」字であれば後期初頭の称名寺期の土器であると考えられる。



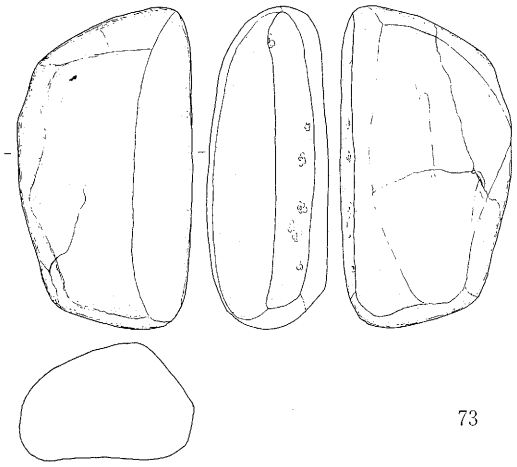
第17図　A区出土遺物(1)（1/3）



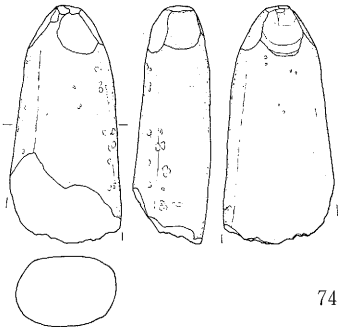
第18図　A区出土遺物(2)（1/3）



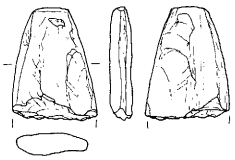
第19図　A区出土遺物(3)（2/3）



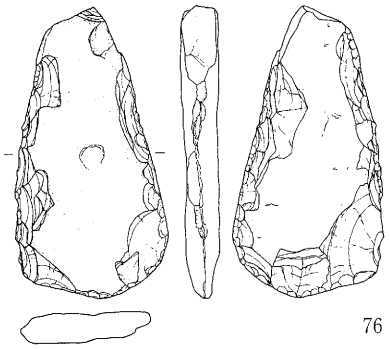
73



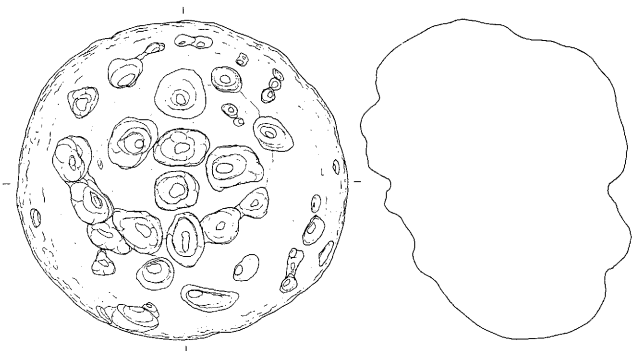
74



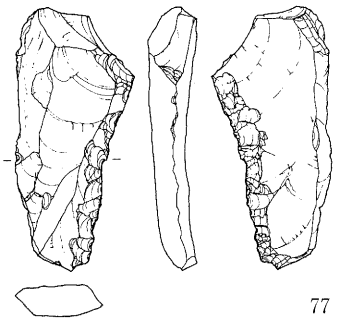
75



76



78

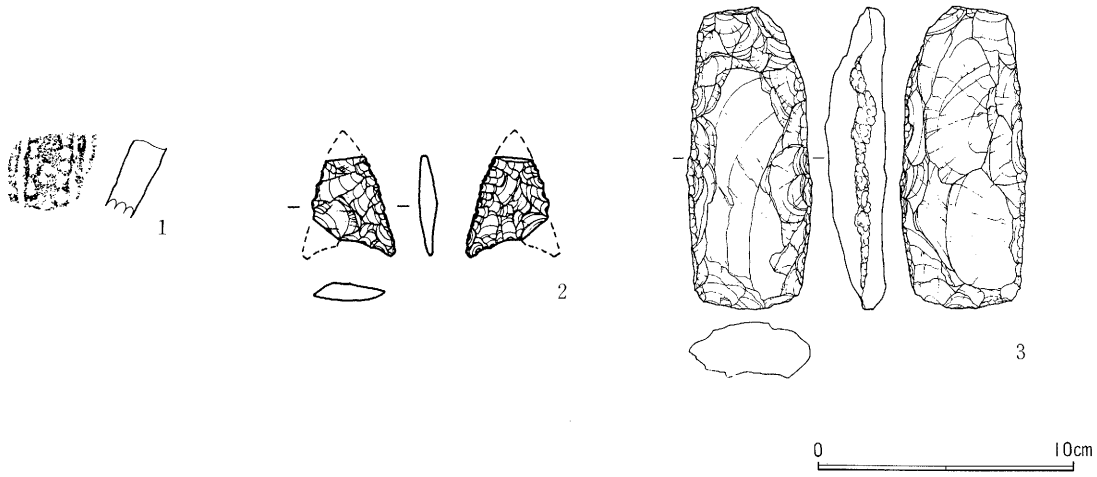


77

0 10cm

第20図　A区出土遺物(4)（1/3）

土器の他に、多量の黒耀石の破片が検出されている。黒耀石の石器は破片がほとんどであり、石鏃は未製品ばかりである。b－5グリットから78の10.5cm大の黒耀石製のスクレイパーが出土している。このスクレイパーは赤みを帯びた黒耀石によって作られている。黒耀石の石器の他には75の磨製石斧や76・77の打製石斧が検出されている。75はb－5グリットより、76・77はb－13・c－14より出土している。b－14の焼土址1付近より78の蜂の巣石が検出されている。

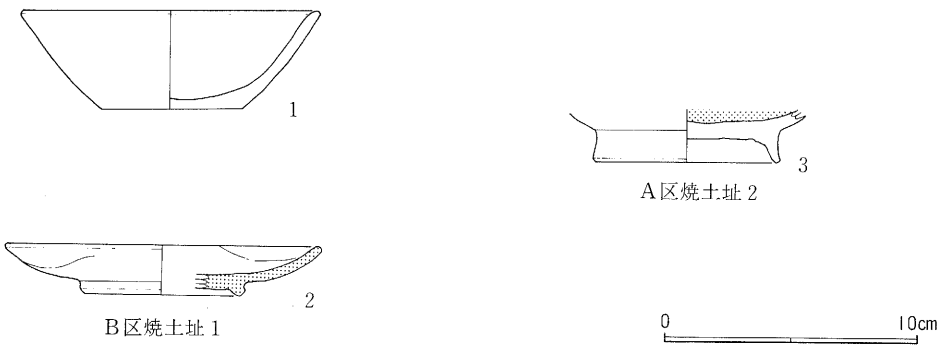


第21図　B区出土遺物（1、3は1/3, 2は2/3）

B区出土の縄文時代の遺物の数は少ない。出土したのは第21図1の1号土坑中から出土した中期後半の土器片と、2のB－1号住居址より出土した石鏃、3の打製石斧である。2については平安時代の住居址の中から検出されているため、平安期に持ち込まれている可能性が十分考えられる。3は遺構外で検出された打製石斧である。打製石斧が検出されたB区c－5グリット付近は細かな土坑があるだけなので、土坑を掘るときか、またこのB区が生産域であり、耕作に使用された可能性が考えられるが、定かではない。

2．平安時代の遺物（第22図）

平安時代の遺物はA区で焼土址2に伴うものと、B区で焼土址に伴うものとがある。出土した資料はともに、土師器、黒色土器、灰釉陶器が出土している。しかし破片ばかりで、図示できたのは第22図の3点のみである。



第22図　平安時代出土遺物（1/3）

第Ⅴ章　結　　語

本址では縄文時代の遺構は中期後半しか検出することはできなかったが、遺物は早期から後期まで検出することができた。前回の調査では、早期押型文土器、前期前半の中越式期の土器、前期後半の諸磯Ｃ式期、十三菩提式期の土器、後期前半の土器が検出されている。今回も早期押型文の土器片が検出され、出土位置も、Ａ区a・b－４・５・６グリッドよりまとまって検出している。早期は与助尾根遺跡で出土し、八ヶ岳西南麓で点々と土器のみ出土するケースが近年非常に多くなっている。

前期は前半を中心に繊維土器を主体として検出されている。前回の調査では中越式期の土器が８号土坑より検出されており、今回前期が出土しているＡ区とは近接しているため、同時期の遺物であるのではないかと考えられる。前期前半は与助尾根南遺跡で住居址が検出されており、本址との関係が注目される。

もっとも多く出土したのは、中期後半の土器で、Ａ区全体にわたって出土している。ほとんどの土器は住居址と同じ曽利Ⅴ式である。近隣の与助尾根、尖石遺跡を見ると、曽利Ⅴ式期の住居址は現在まで２軒しか検出されておらず、非常に数が少なくなっている。菖蒲沢Ａ遺跡は尖石の住居址が減少していくことに何らかの関係があって成立したのではないかと思う。

Ｂ区では、住居址などの生活遺構が発見されず、不明瞭な土坑と、方形柱穴列が検出され、遺構外で打製石斧２点が出土した。前述したように、Ｂ区は耕作を行っていた生産域である可能性がある。

本遺跡で検出されたのと同様の小規模な平安時代の集落は、近年、八ヶ岳西南麓で多く見られようになった。本址の平安時代のＡ区焼土址２、Ｂ区焼土址は住居址のプランが検出できなかったため焼土址としているが、住居址のカマドであった可能性が十分考えられる。また、試掘時に検出された住居址も含めて考えると、４軒の住居址が本址には存在していたことがいえる。住居址の配置を見ると、住居址の間隔は近接せず、Ａ区２号焼土址とＢ区１号住居址は異なる台地に位置し、また、Ｂ区のある同じ台地上に住居址２軒と焼土址１基があり、１号住居址と焼土址間が近接している他は離れている。

この集落の形態は、稗田頭Ａ遺跡を中心とする鴨田・稗田頭Ｃ遺跡の住居址の在り方によく似ている。時期も、出土遺物から、ほとんど稗田頭Ａ遺跡と変わらないため、本址は同様の性格をもった遺跡であると考えられる。以前に『稗田頭Ａ遺跡』で、11世紀初頭の稗田頭Ａ遺跡などの平安時代集落が八ヶ岳西南麓に見られる要因として、麻の栽培を主とする畑作を目的として進出したことを述べた。今回の調査でＢ区１号住居址から麻皮剝器が検出されたことによって、稗田頭Ａ遺跡の調査結果の裏付けとなったと思う。

本遺跡は、縄文時代については、近隣にある尖石・与助尾根遺跡との関連の中で考えていかなければならない遺跡であるため、現在行われている尖石遺跡の試掘調査とともに、再度検討していかなければならない。

参考文献

宮坂虎次　1986　「第二章　縄文時代」　『茅野市史』上巻　茅野市

小池岳史　1994　『立石遺跡』　茅野市教育委員会

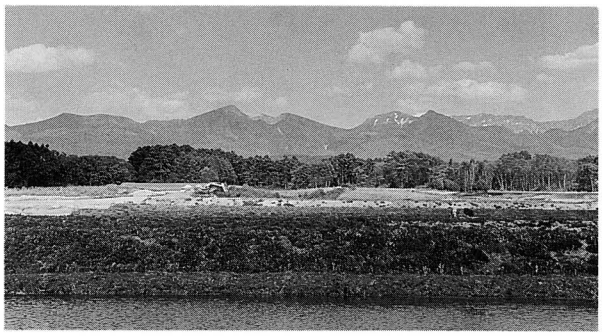
功刀司・柳川英司　1995　『稗田頭Ａ遺跡』　茅野市教育委員会

柳川英司　1995　『菖蒲沢Ａ遺跡』　茅野市教育委員会

図　　版

1　遺跡遠景（西より）

2　航空測量写真

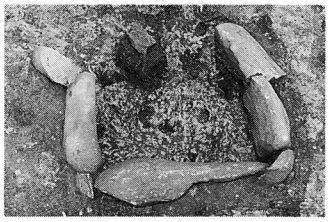


3　遺跡遠景（西より）

4　A区遠景（東より）▶

5　A区1号住居址▶
（北より）

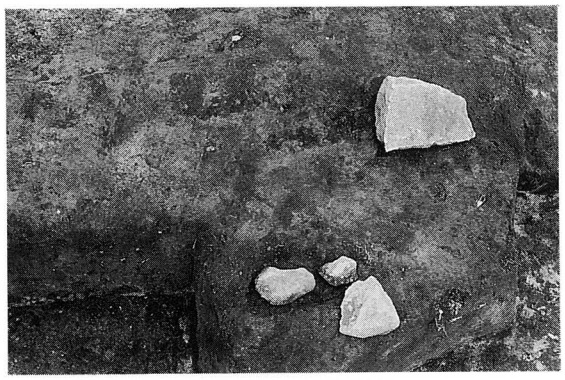
▼6　A区1号住居址炉（北より）



◀7　A区1号方形柱穴列（北より）

▶8　A区集石（北より）

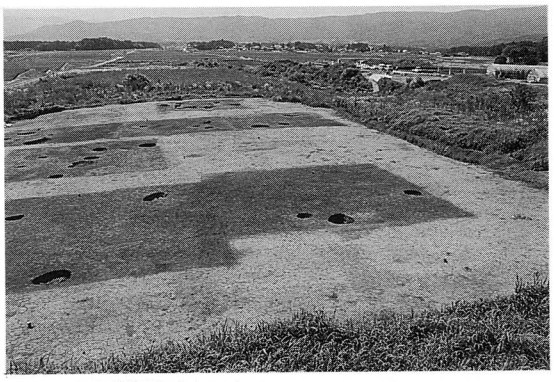
図版－2



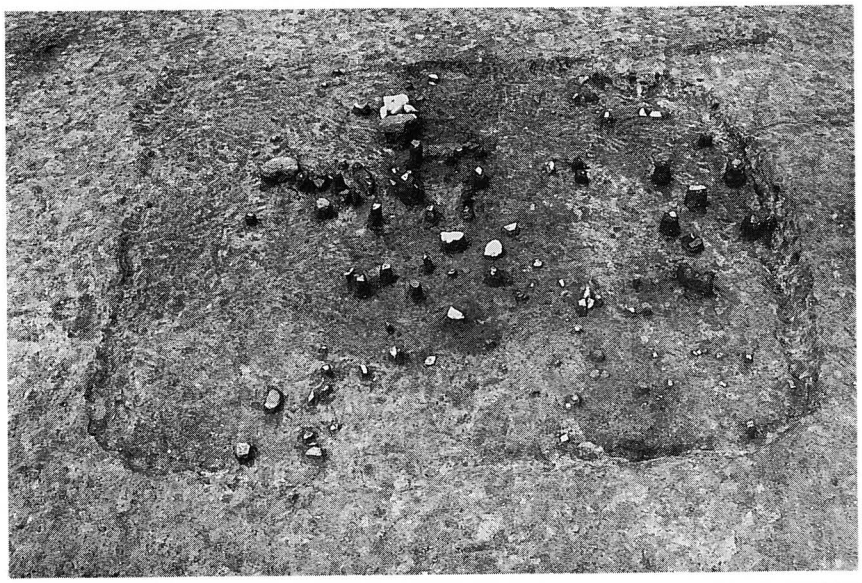
1　A区焼土址1（北より）

2　A区焼土址2（北より）

3　B区遠景（東より）

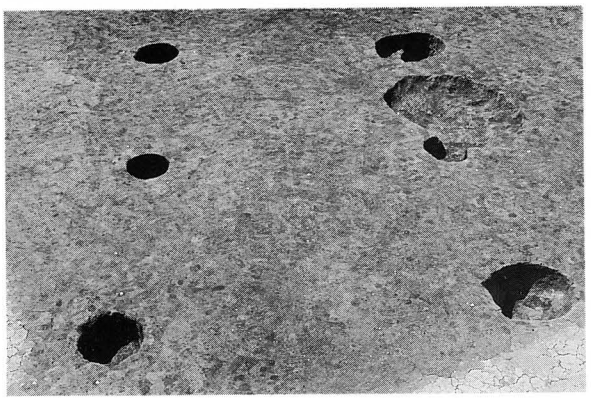


4　B区遠景（東より）



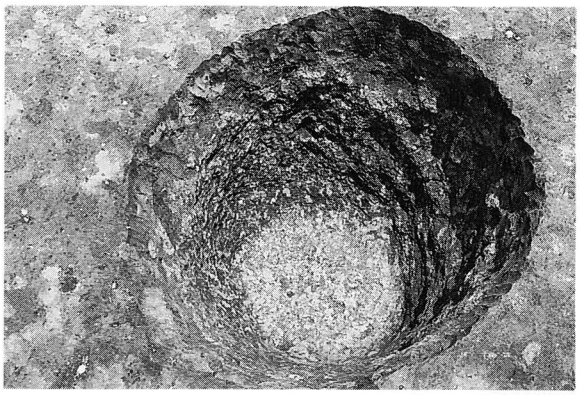
◀5　B区1号住居址（南より）

▼6　B区1号住居址カマド（南より）



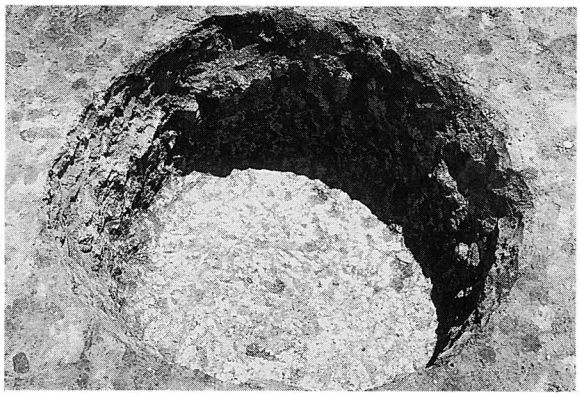
◀7　B区1号方形柱穴列（東より）

◀8　B区焼土址（南より）

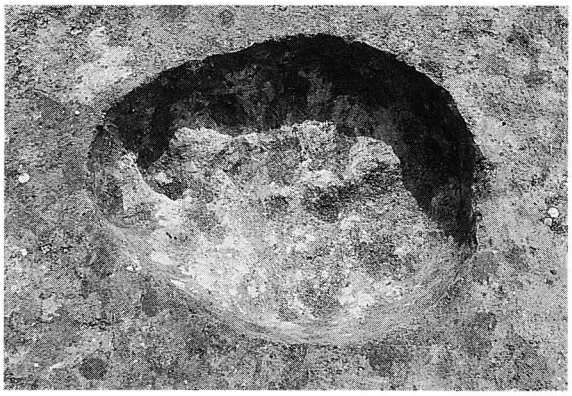


1　B区1号土坑（南より）

2　B区3号土坑（西より）



3　B区4号土坑（北西より）



4　B区27号土坑（東より）

5　B区31号土坑（北より）

6　B区34号土坑（西より）

7　建設現場代理人研修会

8　発掘に携わった方々

報告書抄録

ふりがな	しょうぶざわA　いせき
書名	菖蒲沢A遺跡
副書名	平成7年度県営圃場整備事業堀地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	柳川　英司
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391　長野県茅野市塚原二丁目6番1号　TEL（0266）72－2101
発行年月日	西暦1996年3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
菖蒲沢A	長野県茅野市 湖東　堀 豊平　南大塩	20214	204	36° 00′ 53″	138° 14′ 01″	1995年 5月23日 ～ 8月4日	3,590m²	県営圃場整備事業堀地区に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
菖蒲沢A	集落址	縄文時代　中期 平安時代	縄文時代中期 住居址1軒 方形柱穴列 2基 焼土址1基 土坑31基 平安時代 住居址1軒 焼土址2基 近代 掘立柱建物址 1軒	縄文時代 早期、前期、 中期、後期、 土器、石器 土師器坏・高台付坏、甕、黒色土器坏・高台付坏、灰釉陶器碗・皿麻皮剝器	

菖蒲沢Ａ遺跡

―― 平成７年度県営圃場整備事業堀地区に
伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ――

平成８年３月18日　印 刷
平成８年３月22日　発 行

編　集　茅野市教育委員会
発　行　長野県茅野市塚原二丁目６番地１号
☎（0266）72－2101㈹
印　刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
☎（026）244－0235㈹